Student Intern Workshop Report

2022 — 2018

学生インターン
ワークショップレポート

この冊子は石塚計画デザイン事務所のインターン生が
作成したレポートをまとめたものです

Ishi Planning & Design Co.

2022

田園都市で「楽しむ」を考える　誰もが関わり、活動できるまち青葉区
次世代郊外まちづくりトークフェスタ　～田園都市で暮らす、働く、楽しむ～

ゆったりと始まったオープニング

良く晴れた 5 月 22 日の昼、たまプラーザにゆかりのある沼尻了恵氏のゆったりとしたウクレレの演奏「たまプラーザソング」とともに、イベントが始まりました。和やかな雰囲気の中、集った数多くの参加者が音楽で一体感に包まれ、掛け声とともに楽しそうにハイタッチしていました。

本イベントは、横浜市と東急株式会社による「次世代郊外まちづくり」の一環として行われました。横浜市北部地域の田園都市線沿線の郊外住宅地において、既存のまちが抱える様々な課題を産学公民連携によって解決し、豊かなライフスタイルの創出を目指していく、住民参加型・課題解決型のプロジェクトです。今回は、2022 年の協定更新により、これまでのキーワード「暮らす」「働く」に「楽しむ」が加わったことで、「田園都市で楽しむ」とは何かを、レクチャーやワークショップを通して青葉区に関わる者同士で考えました。

実践者によるレクチャー、参加者のワークショップによる議論

ゲストは、青葉区で活動する様々なジャンルに精通した 6 名。＜青葉区 × スポーツ＞、＜青葉区 × アート＞など、田園都市で取り組む活動を写真や映像とともに紹介していただきました。「日体大 SMG 横浜」･村野浩一さんは、地元のチームの勝利が「自分のことのように嬉しい」と語っていました。たまプラーザの階段や遊歩道をペイントする「100 段階段プロジェクト」代表･藤井本子さん。カラフルに彩られた階段は、私も思わず登ってみたくなります。田園都市でどのようにライフスタイルを楽しむのか、その一例を知るとともに、多種多様なジャンルとの取り組み方を示していただいたことで、誰でも青葉区に関ることができる可能性があると実感しました。

レクチャーの最後は、東京大学大学院まちづくり研究室教授の小泉氏。様々な取り組みをする人がいて、トライできる環境があることが青葉区の良さである、と述べられていました。つづくワークショップでは、①「『田園都市で楽しむ』とは何か」②「まちにこんな『楽しむ』があったらいいな」をテーマに、皆で話し合いました。②では、「楽しむ」とは何か、から根源的に考えるチームもあり、熱いトークが繰り広げられました。

「田園都市で楽しむ」を考える

イベントの最後に行われた交流会では、妖怪の衣装を身にまとった参加者が「アヤカシマルケ」の曲に合わせ全身を使って踊り、属性を超えた関係者がまさに「楽しむ」忘れられない光景となりました。「アヤカシマルケ」は、アヤカシ（妖怪）＋マルケ（だらけ）という意味です。コロナ禍でも、団地の皆でまちを盛り上げていこう、という目的で企画されました。「アヤカシマルケ」の踊りのように、老若男女問わず参加でき、思わず「何だろう？」と見入ってしまう魅力が、人々を巻き込むことにつながるのではないかと思いました。日常にちょっとした魅力を見つけること、それがまちの人同士、初めて町に来た人をつなぎ、まちに関る人が増えていくことが「田園都市で楽しむ」力なのではないでしょうか。熱い思いをもつまちの方々によって青葉区が今後どのような場になっていくのか、期待が高まります。（森本）







●インターンレポーター：日本大学大学院理工学研究科修士 I 年　森本 あんな
●開催日時：2022 年 5 月 22 日　●実施場所：スプラス青葉台　●参加者：田園都市に在住の方、田園都市で働く方、横浜市職員、東急（株）の社員

まちづくりへの当事者意識と「交流」の実現

次世代郊外まちづくりトークフェスタ　～田園都市で暮らす、働く、楽しむ～

次世代郊外まちづくりの新たな一歩

横浜市と東急が協働で 10 年にわたり行ってきた「次世代郊外まちづくり」。新たなテーマ、「田園都市で暮らす・働く・楽しむ」の中でも、今回は「楽しむ」に焦点を当て、ゲストによるピッチトークや、「楽しむ」を考えるワークショップやマルシェなどが行われました。どのセクションにも様々な人が訪れ、ゲスト同士、出店者同士、参加者同士の交流も多く見られました。

青葉台を盛り上げる様々な活動

ピッチトークでは、高校教諭の方から独自の活動を行っている方まで、様々な方法で田園都市沿線を盛り上げるゲストの方々が自身の活動について紹介していました。例えば、音楽活動をしている方、青葉台ならではの地形を生かしたアート活動を行なっている方、踊りを通して町おこしを行っている方などが来場し、講演を行いました。それぞれ特色がありながら、自分たちのまちの状況に当事者意識をもって活動し、まちの問題点や繋がりをしっかりと自分のこととして捉え、自分たちで行動を起こしていました。私は今回のようなまちづくりイベントに参加するのが初めてだったので、その熱心な姿勢に感銘を受け、自分が他人事のように考えてしまっていた自分の地域の状況や課題にもう一度しっかりと目を向けてみようと感じました。

議論が止まらないワークショップ

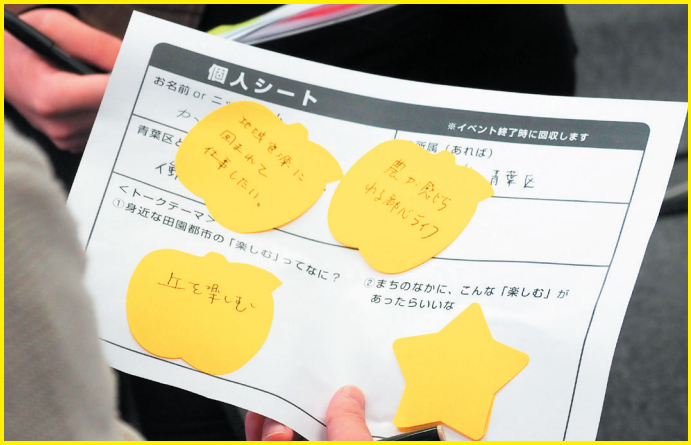
このイベントで最も印象に残ったのは、「楽しむ」を考えるワークショップ。参加者が自由に 3、4 人のグループを組み、「田園都市の楽しむってなに？」と「まちの中にこんな楽しむがあったらいいな」という 2 つの議題についてディスカッションが行われました。

大学の授業でも多くのディスカッションがありますが、自分の意見だけ発表しその後の議論になかなか発展しなかったり、時間が余ってしまい無言の時間が続いたりという風に、なかなかうまく行かないことが多くあります。しかし今回のイベントでは、議論が始まりしばらく経つと、静かになるどころかどんどん活発になり、みんな笑顔で自分のおすすめの場所を紹介したり、楽しそうに話している姿が印象的でした。

まちづくりを行う上で「交流」という言葉がよく使われますが、実際にどんなことをすれば交流ができていると言えるのかを見極めることは難しい課題のように思われます。しかし、特にアイスブレイクなども行わず、中には初めて青葉台を訪れたという人もいる中、全体発表になっても止まらない議論は、まさに参加者同士の良い交流が実現されていると感じました。

みなさんの熱意や前向きな姿勢に驚かされ、このような熱い気持ちを持った方々が引っ張る田園都市のまちづくりの今後に、ぜひ期待したいと思いました。（小笠原）







●インターンレポーター：早稲田大学人間科学部人間環境科学科 3 年　小笠原瞳子
●開催日時：2022 年 5 月 22 日　●実施場所：スプラス青葉台　●参加者：田園都市に在住の方、田園都市で働く方、横浜市職員、東急（株）の社員

まち歩きから分かる「次世代郊外まちづくりの成果」

桐蔭学園中等教育学校　アフタースクールまち歩き地域連携企画

次世代郊外まちづくりを学ぼう

たまプラーザにある「WISE Living Lab さんかく BASE」で開催されたフィールドワークに、桐蔭学園中等教育学校の１～３年生 16 名と先生方が参加され、私は記録係として付き添いました。次世代郊外まちづくりのメンバーやまちで活動している方々と一緒に歩くことによって、たまプラーザのまちを知るだけではなく、まちづくりの現場を見て興味・関心を持ってくれることを願い、このイベントは開催されました。

地域連携企画として、桐蔭学園中等教育学校では昨年度、次世代郊外まちづくりの講演とワークショップが行われています。今回のまち歩きは、そのモデル地区であるたまプラーザが舞台です。大都市郊外の課題や解決策を探るため、開催前に、まずプロジェクトの 10 年間のあゆみや地図から分かるモデル地区の特徴について学びました。たまプラーザを普段利用する生徒や初めて来た生徒もそれぞれいる中、みんな真剣に話を聞いていました。

生徒たちの主体性

事前学習を終え、ウォーミングアップとして、参加者全員でイタリア語でラジオ体操を行いました。初めて聞くイタリア語の音源に笑いが起きつつ、大きく体を動かしました。その甲斐あってか、最初はみな緊張した面持ちだったものの、まち歩きが始まる頃になるとにぎやかな雰囲気となりました。

いよいよまち歩きがスタートです！ 100 段階段や富士見スポットなど、モデル地区内にある６つのポイントを２つのグループに分かれて歩き、地域の人がまちの紹介をしてくださいました。

何よりも私が驚いたのは、生徒たちの主体性です。見る、触る、写真撮影する、地域の人の話は真剣に聞き疑問に思ったことはその場で質問する。地域の人と積極的にコミュニケーションをとっているようでした。階段を下りた後、階段の上から写真撮影するのを忘れてしまった生徒たちは「もう一度階段を上って、写真撮影してもいいですか？」というほど。生徒たちが笑顔で楽しそうに歩いている様子から、まちを歩くことの楽しさを感じてもらえたのではないかと思います。

「地域の繋がりでまちづくりはできている」

まち歩きを終え、３つのグループに分かれて感想や意見交換を行いました。生徒たちは自分で撮影した写真を見ながら、振り返りをしました。中でも「地域の繋がりでまちづくりができていることを感じた」という意見が最も印象深かったです。地域の人の話をしっかりと吸収し、それを実際のまちに落とし込んでくれたのではないかと思いました。私自身まち歩きを体験して、色鮮やかな階段や歩道橋を見ることで、まちづくりによってまちが明るくなったことを、直接感じることができました。モデル地区内には、プロジェクトの成果が形としてまちにあるようです。

今回のように、幅広い世代でまち歩きを行うことで、次世代郊外まちづくりはこの先も受け継がれていくのではないかと感じました。このイベントが、生徒たちが今後もまちに関わるきっかけとなったら嬉しく思います。（中嶋）







●インターンレポーター：中嶋美月　●開催日時：2022 年 6 月 11 日　●実施場所：WISE Living Lab さんかく BASE 共創スペース、次世代郊外モデル地区内
●参加者：桐蔭学園中等教育学校生徒、桐蔭学園中等教育学校教員、次世代郊外まちづくりに関わる地域住民、東急（株）の社員、横浜市職員

まち歩きでバリアフリー点検！整備で、意識で、バリアをなくそう

新川崎・鹿島田駅周辺まち歩き点検ワークショップ

川崎でまち歩き　バリアフリーを再検討しよう

川崎市では、駅やその周辺地域を対象に、だれもが移動しやすいバリアフリーのまちづくりを推進しています。今回のワークショップでは、策定から 10 年以上が経った新川崎・鹿島田駅周辺地区のバリアフリー基本構想の改定に伴い、「まち歩き点検」を実施。障害者や高齢者、川崎市や交通事業者、警察等の関係者が集い、新川崎・鹿島田駅構内や周辺道路空間におけるバリアフリー整備の実施状況や使いやすさを点検します。6 月末にしては想定以上の暑さに見舞われ、水分補給やまち歩き時間の短縮など、様々な暑さ対策を徹底して開催されました。

それぞれの立場から、それぞれの気づき

実施目的やまち歩きの進め方を確認した後、参加者は地図と点検シートを手に、グループに分かれて担当エリアを点検します。私が同行したグループは、聴覚に障害がある方や市の関係者たち。ともに、新川崎駅周辺の道路空間を歩きました。

一見よく整備された歩きやすい道路環境でしたが、参加者からは「音響式信号があるとよい」「歩道で背後からスピードを出した自転車が走ってきて怖い」「誘導ブロックが剥がれている箇所がある」「バス停付近にバスを待てる日陰がない」といった声が挙がりました。聴覚障害の立場からのご意見や当日の気温を反映した気づきが印象的でした。改善点が指摘された一方で、「昔に比べて歩道が整備され広くなった」と、これまでのまちづくりを評価する声も。まち歩きのあとは、大きく印刷した地図に今回の気づきを付箋に書いて貼り、可視化した点検結果を他のグループに共有しました。

お互いの人権や尊厳を大切にする「心のバリアフリー」

バリアフリーの視点でまち歩きをして気が付いたことは、障害者や高齢者の立場でまちを歩いてみることの意義の深さです。普段の私なら素通りするような箇所も、障害者や高齢者にとっては不便であったり、危険にさらされたりしていることに気づかされました。

歩道は歩行者優先にも関わらず、自転車で歩行者すれすれを駆け抜ける人。音で察知できない歩行者や、俊敏に避けられない歩行者がいるかもしれません。そもそも、歩道を自転車で走ることは原則ルール違反。誰もが当然のルールを守りながら、「すべての人が安全に通行できるのは当たり前である」といったお互いの権利や尊厳を大切にする「心のバリアフリー」の考えを持つことが求められるのではないでしょうか。

「みんな」でつくるバリアフリー

「まち歩き点検」を通して、バリアフリー推進のためにはハード面の整備と一体的に、まちを使うすべての人への「心のバリアフリー」の普及が大切であると感じました。そのためには、バリアフリーとは無縁と考えている人も、みんなが自分ごととして捉えることが必要ではないでしょうか。多くの市民を巻き込みながら、市民の声がダイレクトに届いた基本構想の改定となることを願います！（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 4 年　溝口 開人
●開催日時：2022 年 6 月 30 日　●実施場所：新川崎駅・鹿島田駅周辺　●参加者：連絡調整会議委員、障害者等団体等からの推薦者　等

無知を知る。そこからどうする？

新川崎・鹿島田駅周辺地区バリアフリー基本構想改定に関するワークショップ

ワークショップの準備

土曜日の昼下がり。今回のワークショップは、会場準備の段階から普段と様子が違いました。開催予定の「新川崎・鹿島田駅周辺地区バリアフリー基本構想の改定に向けて」のワークショップ第二回には、事前に車いす利用者の方や聴覚障がい者の方がいらっしゃることが決まっており、会場のセッティングもそれを踏まえたものでした。付き添いの方が一緒にいらっしゃるから席を二つ用意する、手話翻訳の方はどの席が適切なのか。事前準備の段階からそういったことが考慮されていました。ワークショップの運営が難しいものだと思いつつも、それに真摯に向き合っている方々に対して尊敬の念を覚えました。

いざワークショップの開催

定刻になり、続々とやって来る参加者の皆さん。事前の準備の成果か、トラブルもなく開始できそうだと思っていた矢先、講演のためにいらしていた車いす利用者の川内美彦先生から、「トイレが上手く流れない」とのご相談が。言われてみると自分が、車いすを利用される方がトイレの際にどういった苦労をされるのか、考えたこともないと痛感しました。そういった自分の想像力不足という課題意識はワークショップ中何度も付きまとうのでした。

ワークショップによる学び

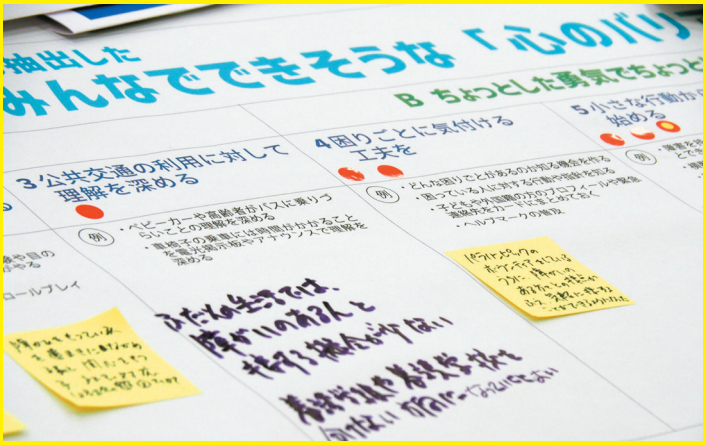
今回は、第一回でまち歩きのワークショップを行った折の課題を踏まえて、専門家の先生の講演と班ごとに分かれてのプログラム。講演では「合理的配慮とは」と「バリアフリー法の基本的な考え方と設計」について伺い、自分がいかにバリアフリーなどに対して無知であるかを再び痛感しました。

その後は「心のバリアフリー」という言葉をキーワードにしたワークで、困っている人がいたとしても助けるための声かけといった具体的な行動にはつながらない現状があるといった話がなされていて、当事者の方々はハードよりもソフトでのバリアを痛感されていることを知りました。私は今回のワークショップに直接参加していたわけではないのですが、自分一人では思いつかないテーマも、ワークショップという形で考えられたことがバリアフリーの理解への一歩になるのかもしれません。

ワークショップの意味とは

ワークショップ中は何度も自分の無知を思い知ったのですが、参加者の皆さんが教育や啓蒙活動を引き合いに人々の理解不足をいかにしてなくしていくのかを論じていて、理解することの大切さを知ることが出来ました。ソフト面でのバリアフリー化という難しい課題に対して、知恵を合わせて前進していく。その事実を知るだけでも、考えるきっかけになります。

今回の地域はバリアフリー化がかなり進んでいるとのことでしたが、いまだにバリアを感じている人たちがいらっしゃいます。今回のワークショップの内容が「新川崎・鹿島田駅周辺地区バリアフリー基本構想」に反映されることで、住民みんなにとって住みやすい地域づくりにつながり、多くの人の意識も変わっていってほしいと思いました。（勝間）







●インターンレポーター：早稲田大学　社会科学部２年　勝間晴規
●開催日時：2022 年 11 月 19 日　●実施場所：新川崎・創造のもり　K2 ハウス会議室　●参加者：専門家の方、市民の皆さん　等

今日も、そしてこれからも公共空間は人々の笑顔をつくりだす

田園都市で暮らす、働く、楽しむパークフェスタ

子どもたちの笑顔は地域を活性化させる

たまプラーザにある美しが丘公園自由広場で、イベント「田園都市で暮らす、働く、楽しむパークフェスタ」が開催されました。身近な公共空間「公園」を舞台に、田園都市の豊かさや楽しさを体感することで、人々にまちとつながりを持ってほしいという目的で行われました。このイベントでは、移動図書館やキッチンカー、読み聞かせなど、子どもから大人まで楽しめる様々な催し物が行われ、お昼頃には一番の賑わいを見せていました。

参加者は、幼稚園から小学校低学年ほどの子ども連れの家族が多いようでした。中でも「おはなしごっこたまプラ」のみなさんによる読み聞かせや紙芝居では、子どもたちがお話を聞くだけではなく、みんなで掛け声をかけたり積極的に参加し楽しむ姿も。子どもたちが楽しんでいると大人も自然と笑顔になり、その場が生き生きとするように感じられました。

キッチンカーを通じた地域のつながり

このイベントの目玉の１つは、キッチンカーの出店です。ホットドッグ、コーヒー、ジェラート、塩豚丼、マグロの販売など様々な食事を販売する車が広場に並びました。お昼頃には、行列ができるほどの盛況ぶり。地元の野菜を活用するなど、いずれの店舗も地域に根ざした工夫が凝らされているようでした。

また、キッチンカーの出店者の方々とお客さんとの活発なコミュニケーションも印象的でした。さらに広場にはテーブルと椅子が置かれており、人々は購入した食事を家族や友人と囲み、会話をしながら食べていました。そこは家族や友人とのコミュニケーションが生まれる場でもありました。キッチンカーをきっかけとして「地元の食材と地域の人」そして「地域の人と人」のつながりが生まれていたのです。

「こんな公園あったらいいな」を考える

「次世代郊外まちづくり」のブースでは、「普段公園ではどんな過ごし方をしているか」や「公園などの身近な公共空間が、どのような場所になるともっとよくなるか」などの４つの項目で来場者の方にシールを配り、アンケートを行いました。

その結果、公園利用者は日頃、遊具や持参した道具で遊んだり家族や友人と憩うことが多いと分かりました。これからの公共空間の活用法については、アスレチックやジャングルジムなどの新たな遊具の設置や動物がいる公園など、家族や友達と相談しつつ、子どもたちが楽しみながら答えてくれました。アンケートの実施を通して、公共空間についてみんなで考え、地域の人の意見を取り入れたより良い公共空間をつくっていくことが大切だと感じました。そこに人々の笑顔が溢れることで、生き生きとした、まちをつくっていくことができるのではないかと思います。（中嶋）







●インターンレポーター：中嶋美月　●開催日時：2022 年 11 月 20 日　●実施場所：美しが丘公園自由広場
●参加者：地域の人、横浜市中央図書館職員、キッチンカー出店者、東急（株）の社員、横浜市職員

学校の特別教室で！“ 居合わせ ” 広がる 地域活動

Kawasaki 教室シェアリング「お試し 学校の新しい使い方」in 土橋小学校

小学校で地域住民が活動できる！？

川崎市では、学校施設開放においてよく使われている校庭や体育館だけでなく、特別教室等の更なる有効活用を進める「Kawasaki 教室シェアリング」に取り組んでいます。

学校は家の近くにあるものの、卒業後は関わる機会がめっきり減ってしまいがち。近くとも遠い存在の学校で地域の人が活動できる仕組みに、活用の可能性を感じます。学校施設開放の現状は、多くの地域住民が校庭や体育館を利用している一方、特別教室の利用頻度が比較的低いこと。今回のワークショップでは、特別教室等の利用ニーズを伺うアンケートに回答した有志が、土橋小学校の図工室や特別活動室、被服室を会場に集い、企画を実施しました。

お試し開放に全 6 企画が集合！

お試し開放のために集まった企画は、漫画やアニメで人気の「ONE PIECE」を題材に対話する「ONE PIECE× 哲学対話」、小学校中高学年を対象とした「子ども哲学対話」、主に大人向けの「哲学対話」、子どもから大人までみんなが楽しめる「16mm フィルム映画」、大人向けの「大人だって楽しい鍵盤ハーモニカ」、小学生までが対象の「楽しく美味しいお菓子を作ろう」の全 6 つ。

企画ごとに対象年齢が様々なのがミソです。子どもたちがお菓子を作る隣の教室では大人たちが鍵盤ハーモニカを楽しんだり、多世代で一緒に珍しい 16mm フィルム映画を鑑賞したり、学校という空間で緩やかな交流を楽しむ様子が見られました。

哲学対話で自分を話そう

今回は哲学対話に関する企画が 3 つも登場！　哲学対話の特徴は、他者の考えを否定しないこと、何を言っても、何も言わなくても大丈夫だということ。自分の経験に即しながら、お互いに問いかけるように話します。

「ONE PIECE× 哲学対話」では ONE PIECE が好きな子どもや大人が集い、自分の好きなキャラクターやその言動を、自分自身と重ねながら対話しました。対話が深まるにつれ参加者の表情が徐々に柔らかくなり、自分の考えを生きいきと伝える姿がとても印象的でした。参加者からは哲学対話への継続的な参加を希望する声も！　誰かと対話する喜びを感じる機会となったようです。

学校で活動する、“ 居合わせ ” でつながる

それぞれの企画を楽しんだ後は、6 つの企画の参加者が一同に会してそれぞれの活動を発表。「大人だって楽しい鍵盤ハーモニカ」の発表では、思いおもいに音楽を楽しむ気持ちに溢れた演奏が披露され、ケーキ作りに参加した子どもたちも聴き入っていました。

それぞれの企画が持つ魅力はもとより、それらが学校という公共性の高い場所で同時に開催されたことで、充足感がぐっと増したように感じられます。学校を舞台に、他の人が活動している様子をなんとなく感じながら、自分の活動を展開する。必ずしも直接交わることはなくても、“ 居合わせ ” ることで緩やかな交流が広がります。「Kawasaki 教室シェアリング」、今後ももっともっと楽しめそうです！　（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学人間科学部人間環境科学科 4 年　溝口開人
●開催日時：2023 年 2 月 4 日 (土)　●実施場所：川崎市立土橋小学校　●参加者：企画者、川崎市民、事務局（川崎市、石塚計画デザイン事務所）

特別教室は、趣味や問題意識を共有し、暮らしやすい地域を作る拠点となる Kawasaki 教室シェアリング「みんなで開こう！川崎小オープンデイ」

特別教室の新たな活用法を

皆さんは休日に小学校の特別教室を訪れたことがありますか？「特別教室」と聞くと、子ども連れや、セキュリティ対策のイメージが強く、卒業以来近づきにくいと感じる方も多いのではないでしょうか。

川崎市民とともにそんな特別教室の活用方法を探るための企画「みんなで開こう！川崎小オープンデイ」。２月５日の朝、外からサッカーをする少年たちの賑やかな声が聞こえる中、川崎小学校の教室開放が始まりました。最初に集まったのは 20 名弱の参加者。初めは少し様子をうかがっていた大人も、カラフルに彩られた飾りつけや展示、駄菓子にはしゃぐ子どもの様子をみて次第に打ち解け始めます。

一体となり共生を考える

最初のプログラムは、フォトジャーナリスト・安田菜津紀さんの講演。ウクライナやシリアへ撮影で訪れた経験談をもとに、難民の現状や共生のあり方について語って下さいました。ときに驚くほどリアルなエピソードもあり、参加者の方々は真剣にメモをとっていました。中でも、私が驚いたのは、難民にも報道格差があるという現状。ニュースでは報道されていない難民がいることや、当たり前の日常生活を送れない子どもたちが多くいることに衝撃を受けました。

講演の後は参加者も含めた意見交換をしました。大学生の「難民の問題に一市民が取り組むのはハードルが高いと感じる」という意見に対し、ふれあい館の職員・遠原さんは、川崎市には人権問題に対するまちづくり条例や読書会もあると話します。難民の問題に対し、国や行政が動くことは大事ですが、まずは市民一人一人が関心を持ち、起きている問題を共有することが第一歩に。そして何ができるかを周りと一緒に考えて行動することが、共生に繋がるのではないでしょうか。

みんなで“川崎ブレイブサンダース”を応援

最後に、バスケットボールチーム“川崎ブレイブサンダース”のユースチームコーチ・村岡さんをゲストに迎えたパブリックビューイングが行われ、会場の参加者皆で試合を観戦しました。村岡さんのコーチならではの解説はとても分かりやすく、皆が試合に夢中になりました。村岡さんは、「バスケットボールとは、傾向と対策のスポーツだ」と話します。一つ一つの局面で、信じられない程たくさんの駆け引きが行われている点が他のスポーツと比べた醍醐味なのだとか。そう聞いてから試合を見ると、先ほどとまったく別の試合のように見えます。自分の想像を超えたところでとてもたくさんの出来事が起きているのだと気づきました。

教室開放を継続するために

今回の教室開放を体験して、特別教室には以下の可能性があると気づきました。一つ目は、年代性別関係なく何かに共感し、夢中になることでコミュニティが生まれる場となること。二つ目は、誰かと一緒に問題を共有し考える場となること。私自身、普段自分一人で物事を考えてしまいがちですが、周囲と協力することで視野が広がり実現できることが多くあります。

特別教室には、誰もが気張らずに集まれるからこそ、趣味を共有したり、様々な問題を真剣に考えることができるのでしょう。私も今後の教室の開き方を考えていこうと思います。（森本）







●インターンレポーター：日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修士１年　森本 あんな
●開催日時：2023 年２月５日　●実施場所：川崎小学校　●参加者：川崎市民、特別教室での活動の参考になる講師、事務局（川崎市、石塚計画デザイン事務所）

2021

話すことはアイデアに、聞くことはヒントに小さなことがまちづくりにつながる
みんなの富岡・能見台 丘と緑のまちづくり「おかまちフォーラム」

3年かけて準備してきたプロジェクトをお披露目！

横浜市と京急電鉄が、まちづくり IMAGE BOOK のお披露目会とリーディングプロジェクトのメンバーの募集を、富岡・能見台の 2 つの地域で同日に開催しました。

プロジェクトは、地域住民の方と、まちづくりワークショップなどの話し合いを重ねて 3 年かけて生まれたもの。2 つの地域で計 8 つのプロジェクトがあり、ものづくりを通して、まちの愛着とワクワクを創出する「よりみち DIY」、空き家をみんなの多様な拠点にする「空き家 WANTED ！」、電車・バスだけでは難しい、まちと人を繋ぐ新たな地域交通の創出「とみおかーと」など幅広い内容です。

これからのまちづくりのヒントに

これまでの取り組みとプロジェクトの概要を説明した後は、トークセッション。まちづくりを行う企業や研究する大学の方が、新規事業や大学のゼミの取り組みを紹介してくださいました。

一方、高齢者の方にとってはあまり聴き慣れない「プラットフォーム」や「パブリックスペース」など、カタカナの言葉が多く飛び交う中、一所懸命にメモを取る様子も。まちをより良くしたいという参加者の強い気持ちを感じました。

自分のことを話す、それもまちづくりにつながる

オリエンテーションが終わると、プロジェクトごとにブースに分かれ、興味があるところに自由に話を聞きにいくフリータイムがスタート。なかには、「ものづくりが好きなんだよ」「こういう取り組みがあるの知ってるかい？」と、おっしゃる方も。自分の得意なことや知っていることを伝えてくださると、運営側も、その人にとってのまちづくりに参加する第一歩を提案することもできそうです。

なにより、「自分にできることがあるかな」と話してみることが大切。「できることから実現しよう」というまちづくりの基本姿勢が示すように、今の自分が「できないこと」も「できること」も、地域で交流し、知識や力を共有し合うことが、今後の地域の問題の解決につながるのではないでしょうか。

石デのスタッフはファシリテーター？

石塚計画デザイン事務所のスタッフがブースごとに分かれ、地域の方にプロジェクトの説明をする様子を見ていると、「あれ、ファシリテーターはどこだろう？」「地域の人に逆に教えてもらってる？」と思った場面も。

ファシリテーターとは、中立の立場で話し合いを円滑に行い、意見を効率よくまとめる役割だと私は考えていました。しかし、石デのスタッフは、もっと参加者に近い存在で接し、同じ目線で話をして向き合っているようでした。

私は、石デスタッフはファシリテーターだけでなく、「ジェネレーター」という役割も担っていると思います。「ジェネレーター」とは、話をまとめるだけでなく、自分も一緒に考えて楽しみ、新しいアイデアや価値を創造する役割。

予測できない社会だからこそ、地域の一人一人が抱えるまちの課題に仲介役として関わるだけではなく、一緒に向き合っていく姿勢がこれからの時代に必要なのかもしれないと気づいた日でした。（中島）







●インターンレポーター：武蔵野美術大学 造形構想学部 クリエイティブイノベーション学科３年　中島 純
●開催日時：2021 年 6 月 13 日　●実施場所：地域ケアプラザ／はまと脳神経外科クリニック　●参加者：地域の課題や暮らし、新しい取り組みに興味がある方

行政も企業もまちの人も！みんなで描く未来志向の「かわまちづくり」

聖蹟桜ヶ丘かわまちづくり　現場確認＆意見交換会

「聖蹟桜ヶ丘かわまちづくり」始動！

映画「耳をすませば」のモデル地とされる聖蹟桜ヶ丘駅エリア。映画の面影を感じさせる駅前からたった５分ほどの距離に、多摩川が流れています。

このエリアでは、現在、駅北口から多摩川にかけて、新しいマンションや商業施設、河原の公園の整備など河川空間のまちづくりを一体的に進めるプロジェクト「聖蹟桜ヶ丘かわまちづくり」が進められています。多摩市役所職員や関係企業社員、地域のキーパーソンが会し、今後の方向性やアイデアを話し合いました。

現場確認 – 日差しのもとでかわまちを想像 –

まちづくりは現場を知るところから。総勢 40 人ほどの参加者を５つのグループに分け、「かわまちづくり」の舞台となる多摩川周辺を視察しました。多摩市職員の説明に熱心に耳を傾け、河原の現状と計画の全容を確認します。

暑い日差しのもとで汗を拭いながら、これから公園に整備される河原の未来を想像しました。時折、多摩川に架かる橋の上を京王の電車が駆けて行きます。どこかふるさとを感じさせる温かい景色でした。

意見交換 – 未来志向のアイデアたち –

参加者たちは、駅前のアウラホールに舞台を移し、「かわまちづくり」の今後について意見を交わしました。現場確認をしたグループごとに、「かわまちづくり」に期待することや、今後の進め方のアイデアを共有します。

意見を発信するのは地域のキーパーソンだけではありません。聖蹟桜ヶ丘に関わるまちの一員として、多摩市職員や関係企業社員も市民と同じ立場で参加しました。

新しいマンションの建設や河原の自然に手を加えることに抵抗がある市民がいるのは、当然のことです。けれど、様々な懸念を踏まえた上で、聖蹟桜ヶ丘に長く暮らすひと、新たに引っ越してくるひと、仕事や買い物で訪れるひと、将来の子どもたちのことを想い、未来志向の議論が行われました。「子どもたちが制限されずに遊べる」「皆が思いおもいに過ごせる」空間にしたいという声が多く聞かれました。

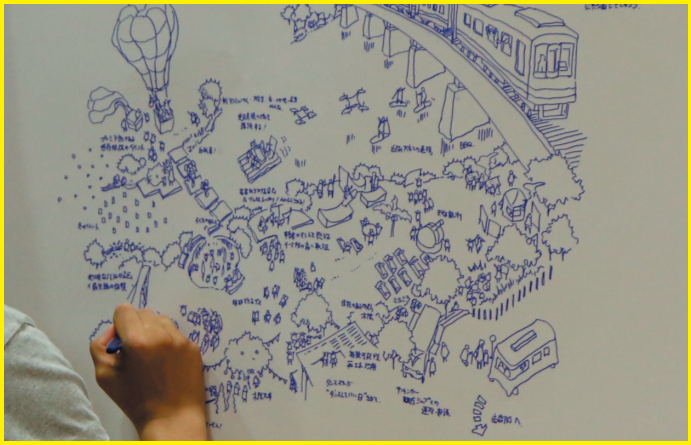
みんなで進める かわまちづくり

参加者の議論を聞いた私の率直な印象は、参加者みながかわまちづくりに前向きであること。子どもから大人まで、既存住民から移住者まで、あらゆるひとが快適に過ごせるかわまち空間の整備のために、まちのメンバーの想いを共有することができたようです。

行政も、企業も、もちろん住民も、みな聖蹟桜ヶ丘の一員。まちづくりをするときに、まちのメンバーみなが同じ立場で、同じ目線で議論を重ねることの大切さを感じるワークショップになったようです。

電車が多摩川の上を走る光景が素敵な聖蹟桜ヶ丘エリア。「かわまちづくり」により、まちの人の笑顔が溢れる憩いの空間ができる様子が目に浮かびました。メンバーみなで進める今後のまちづくりに期待が高まります。（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科３年　溝口 開人
●開催日時：2021 年 6 月 18 日　●実施場所：一ノ宮公園 / アウラホール　●参加者：多摩市 、地域のキーパーソン

自然と共に生きる仕事。それが北海道の農林漁業

北の大地のオンラインジョブサロン

今の暮らしを変えたい、そのきっかけに。

自然と共に生きる仕事。それが北海道の農林漁業の特徴です。しかし、興味を抱いても移住や転職といった次の一歩を踏み出せずにいる方もいるのではないでしょうか。

そこで「北の大地のジョブサロン」では、実際に移住して、イキイキと働くゲストをお迎えし、生の声を伝える機会を提供しています。

今回は、酪農から藪内直美さん（浅野牧場・釧路市）、林業から齋藤司さん（株式会社イエツネ林業・足寄町）、漁業からは石川典嗣さん（有限会社 総幸丸水産･石狩市）にご登壇頂きました。

農林・漁業で働く人たちの生の声

トップバッターは、漁業の石川さん。仕事は朝の１時 30 分から始まり、20 時には就寝。天候や季節に左右されるため、漁師の休日は不定期ですが､漁師の魅力は「海から見る陸の景色」。陸から海を見ることはあっても、海から陸を見る機会はなかなかない。漁師ならではの生活のリズムと特権を、語っていただきました。

次は酪農の藪内さん。兵庫県ご出身で、北海道へ大学進学後、酪農経験がゼロの状態で浅野牧場に就職されました。その暮らしぶりは、次の章で触れます。

最後は、林業の齋藤さん。東京で働きながらご家族と暮らしていましたが、林業の転職フェアを機に、その後札幌で林業研修を受講。東京に家を残したまま、「お試し移住」を経て、後にご家族も移住されました。

私の出身地でもある釧路ではめずらしいケースなのですが、藪内さんも齋藤さんもペットとしてヤギを飼っているそう！農林漁業で働く人ならではの共通点も垣間見ることができました。

「なぜ北海道？」「自分の時間はありますか？」

セミナーをしめくくる質問コーナーでは、来場者から「なぜ北海道を選んだのですか？」という声も。ゲストスピーカーは、「北海道は機械の普及率が高い。それが本州との違いだった」という仕事における利点や､「北海道そのものが好きだから」という趣向、移住したからこそわかる実感を交えてお話しされていました。

また「自分の時間はありますか？」という質問に、藪内さんが「働き方は選べる。私はここまで！と決めて、あとは家庭菜園など好きなことをやっています」とお話しされていたのが印象的でした。

酪農だけでなく育てた野菜を直売所で販売することもあるそう。また、仲間と一緒に北欧フィンランドの伝統的なモビール･ヒンメリを制作するなど、日々の暮らしの楽しみを自分で作っていらっしゃる姿勢がとてもカッコいいな、と思いました。

暮らしの新しい一歩に

最後に、ゲストの皆さんからは「ぜひ、気軽に体験しに来て欲しい」という提案も。今の暮らしを選択して良かったからこそのひと言かもしれません。

今回のイベントを通して、来場者も農林漁業の仕事と暮らしを想像できたのではないでしょうか。ぜひ、想像で終わらせず、世の中が落ち着いたら、来場者の方も実際に北海道での暮らしを体験して下さったらいいなと思います。それが、みなさんにとっての新しい一歩になったら良いですね。（中島）







●インターンレポーター：武蔵野美術大学 造形構想学部 クリエイティブイノベーション学科３年　中島 純
●開催日時：2021 年 7 月 10 日　●実施場所：オンライン　●参加者：農林漁業に興味のある方、北海道の暮らしを知りたい方、今の生活を変えたいと悩んでいる方

”人”が面白いまち、川崎　新しい支所で人と人を繋げよう！

まちの使い方ラボ① 青空ラボ

「まちの使い方ラボ」がキックオフ！

川崎市では、大師支所と田島支所の建て替えとともに、区役所と２つの支所の機能再編に向けた取り組みが進められています。これまでに市民のみなさんの想いを伺い、「人と人をつなげてコーディネートする支所」「地域のあたらしいチャレンジを応援する支所」「子どもたちが安心できる居場所を創出する支所」という３つのコンセプトが出来上がりました。

現在、これらを体現するためのプロジェクト「まちの使い方ラボ」が始動中。ラボメンバーがやってみたいまちの使い方を実験し、もっとまちに開かれた支所のあり方を探すもので、今回の「青空ラボ」は、そのキックオフイベント！大師公園を舞台にした実験と、公園に隣接する大師支所での講演・トークセッションが同時開催されました。私はスタッフとして参加。当日の講演・ポスターセッションの様子をレポートします！

“マイパブリック”でまちの人が面白いまちに

「マイパブリックでまちに出よう」と題し、株式会社グランドレベルの代表を務める田中元子氏を招き、講演が行われました。”1階づくりはまちづくり”をモットーに、「喫茶ランドリー」の運営などを展開されています。オーディエンスは、会場にいるラボメンバーと、別室からパブリックビューイングで参加する地域の方々です。

田中さんが教えてくださったのは、自分の好きなことをまちで行う「マイパブリック」の考え方。小さな屋台を出して、趣味の延長でコーヒーを振る舞ったり、DIY体験を提供したり、内容はなんでもOK！　受動的に物事を消費する姿勢から、能動的に生産する姿勢を発露させることが大切なのだそうです。

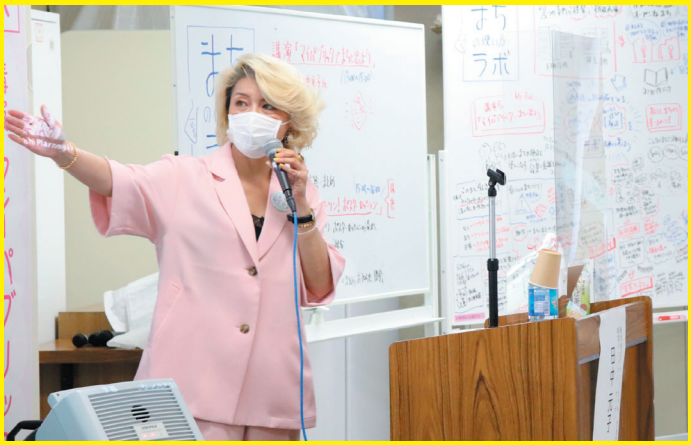
田中さんのお話で私の心に響いたのは、「まちらしさ」とは「まちの”人”らしさ」であるということ。活性化というと、まちの名所や名産品、有名人をアピールしがちです。しかし、今のまちをつくっているのは今ここに暮らす人々。まちの人が自分の好きなことでまちを盛り上げる、まちの人が面白いまち。「マイパブリック」の考え方に、オーディエンスも感銘を受けていたようでした。

“新しい支所”でつながれ！マイパブリック

続いては、まちのキーパーソン３名と田中さんによるポスターセッション。田中さんのお話を受け、まちのキーパーソンの１人で子育て中のママたちで手仕事を発信する米澤奈緒さんは、「やり方は様々だが、皆まちのために同じ思いで活動している。お互いの情報を知ることができる場所、知りたいと思える仕掛けがあると良い」と語りました。

私が「青空ラボ」を通して感じたのは、川崎は人に富んだまちであるということ。スポーツ振興、子どもの居場所づくりに取り組む人など、それぞれの分野で、スタイルは違えど、まちのために活動している方がたくさんいらっしゃいます。新しい支所が川崎の人と人をつなぎ、その面白さを川崎の内外に発信できる場となる可能性にワクワクしました。（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科３年　溝口 開人
●開催日時：2021年7月22日　●実施場所：川崎市川崎区役所 大師支所・大師公園　●参加者：セッション：まちのキーパーソン / ラボメンバー / 川崎市職員 / 地域の方々

五感で未来を体験！一ノ宮公園の将来像は？
聖蹟桜ヶ丘かわまちづくり　青空ワークショップ（ミニ社会実験）

みんなで確かめる現場の様子

地域の方々との話し合いを通じて作成された設計図はどのようなものなのか？今回は、公園づくりに関心のある地域にお住まいの方、多摩市役所職員、民間企業の方と一ノ宮公園を訪れて設計図を五感で確かめ、公園をどのように活用・運営していくべきなのかを考えました。

最初は３つのグループに分かれ、一ノ宮公園を歩き回りました。設計図に描かれている階段の広さや出店が予定されているキッチンカーの大きさをテープやレジャーシートを用いて動線を想像したり、騒音計で音の大きさを計測したり。ワークショップに参加した方々は初対面の方も多かったのですが、身体で感じたことを和気あいあいと話し合う様子がとても印象的でした。

公園でリラックス！

１時間後、みんなで一緒にのんびりタイム！コーヒーやお茶を飲みながら楽しく談笑しました。しかし、これももちろんワークショップ。おしゃべりしながら日なたと日陰の地面の温度を測ってみたり、音楽をいろいろな音量で流して気になるボリュームはどれくらいなのかを調べてみたり。屋外のせいか、思っていたよりも騒音が気にならないという発見もありました。実際、音楽に耳をすませ、風を感じながらレジャーシートの上で横になってみたところ、とてもリラックスすることができました。都心部は身近に自然を味わうことができる場所が少ないので、川が近くにあることや広々とした空間でのどかな雰囲気を味わえるというのも一ノ宮公園の魅力になると思います。皆さんも一ノ宮公園で横になってみてはいかがでしょうか？

その後はストレッチの時間。みんなで身体を動かしてみると、公園の広さを実感することができました。10月下旬に差し掛かり少し肌寒かったのですが、そんな寒さを忘れさせるように石塚計画デザイン事務所は熱い心を持って半袖半ズボンで臨みました！

白熱した意見交換会

最後はワークショップで得た気づきをみんなで共有する時間。グループごとにディスカッションを行ったところ、議論が盛り上がりすぎて終了時間ぎりぎりまで話し合いが続きました。

「水たまりができやすい」といったインフラの問題が指摘されたり、「たくさんの団体が公園の運営に絡めるような工夫が必要そう」といった制度･運営面の課題への対策方法、公園が「遊べる空間」、「座れる空間」になるよう「公園の使い方に余白を持たせたらよさそう」というアイディアが出ました。

みんなでつくる一ノ宮公園

今回のワークショップを経て、参加者の方々からたくさんの重要なご指摘をいただくことができました。今後も「まちとつながった公園」、「地域や民間企業が運営に関わる自由度の高い公園」を目標に、ディスカッションを重ねながら公園に関わる方々のご意見を設計に反映していくそうです。一ノ宮公園がどのような姿になるのか、私もとても楽しみです。（三國）







●インターンレポーター：早稲田大学大学院 社会科学研究科 修士１年　三國 陸真
●開催日時：2021 年 10 月 26 日　●実施場所：一ノ宮公園　●参加者：地域の方々、多摩市役所職員の方々、民間企業の方々

宮前区らしいソーシャルデザインセンター ラウンドテーブルでつながる！盛り上がる！市民創発

宮前区らしいしくみ「ラウンドテーブル」をお試し実施しよう！

宮前区らしい SDC「ラウンドテーブル」をお試し実施しよう！

川崎市では、多様な主体が連携した「市民創発」で地域課題を解決するための基盤となる「ソーシャルデザインセンター」（SDC）の創出が市内各区で進められています。

今回のワークショップの舞台である宮前区では、「（仮称）『希望のシナリオ』実現プロジェクト」として市民活動支援のしくみが検討されてきました。これまでに、区内の活動を相関図やマップにまとめ、市民有志で結成された出入り自由な「みやまえ取り組み隊」による 6 回の現地ツアーが実施されてきましたが、いよいよ今回は宮前区らしい SDC のしくみを実践！「みやまえ取り組み隊」メンバーで「ラウンドテーブル」にトライしました。

ラウンドテーブルとは？ みんなでアイデアを持ち寄ろう

現在かたちを模索しているラウンドテーブルは、企業、大学、町内会・自治会、行政、市民活動団体といった多様な主体がともに可能性を模索しながら協働・連携するプラットフォーム型。まちで活動するプロジェクトオーナーの課題や実現したいことを、ラウンドテーブルメンバーが自身の持つノウハウや資源でどのように応援できるかを一緒に考えます。

今回のお試し実施では、「①公園 × マルシェで『拡大まちかどシェア』」「②シニアが気軽に立ち寄れる場（宮前区版道の駅？）をつくってみよう！」「③民間が保有する地域の場と地域活動をマッチングしよう！」と題した 3 つのプロジェクトが集まりました。

続々集まる　アイデアや支援の声

①について議論したテーブルでは、「宮前には色々な活動をしている人がいることから、活動場所を提供したい」というオーナーの想いのもと、「手作り品を販売するスタッフがいない」「ノウハウや人材が欲しい」という課題に対して皆で意見交換をしました。町内会や子ども会に参加しているテーブルメンバーからは、若い世代を取り込むために、町内会や PTA、子ども会のメンバーに運営の手伝いを依頼することが提案されました。また「写真撮影や広報に協力できる」「ノウハウブック作成に協力できる」といった支援の声が数多くあがりました。

シニアが集える場所づくりを目指した②では、コミュニティカフェや公園体操など既存の取組とコラボして移動図書館のように回っていくなど「道の駅」に縛られないアイデアが。③では、今年 9 月にハンドメイドなどのショップが梶ヶ谷のコジマ × ビックカメラに集合し開催された「コジマルシェ」をモデルケースに、イベントを持続的に開催するための議論が展開されました。

宮前だから！ラウンドテーブルでつながる地域資源

地域で新しく活動しようと思うと、きっとノウハウや人材などが必要になると思います。そんなとき、ラウンドテーブルの仕組みがあれば、多様な人からアイデアをもらい支援を受けることができるでしょう。今回のお試し実施では、人と人、あるいは活動と活動がつながる数多くの瞬間が見られました。そして、ラウンドテーブルが盛り上がるのは、市民活動の資源が豊富な宮前だからこそです。ラウンドテーブルで宮前の市民活動がさらにつながり、新しい活動や価値が生まれていく様子が目に浮かぶようです。（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 3 年　溝口 開人
●開催日時：2021 年 11 月 3 日　●実施場所：宮前区役所 1 階 健診ホール　●参加者：みやまえ取り組み隊、川崎市職員、傍聴での参加者

講座を通した体験記

コーディネート力養成セミナー

市民が語る熱い想い

札幌市の市民文化局が主催する、地域活動やスキルアップに活かせる「コーディネート力」を身につけるための講座。全３回の２回目に参加しました。テーマは、地域コーディネーターの役割とファシリテーションの基本について。具体的には、コミュニティデザインの手法を５つのステップに分け、ワークを交えながら学びます。

講師は、まちづくりコーディネーターの千葉晋也さん。千葉さんは、市民が主役となるまちづくりの、ワークショップの企画・運営や市民活動団体の支援などを行なっています。今回は、全３回の講座を通してファシリテーションの技術や、広報・デザインの技術を参加者に伝えていました。

参加者は、札幌市の住民や働いている人たち。参加者自ら本講座での目標を語ることからはじまり、前回の講座での学びをもとにした後日談もあり、「楽しみにしていた！」とおっしゃる方も。それぞれの熱量が感じられました。

可視化の重要性を実感

まちづくりに関わらず、会議や意見交換等で使用するオンラインツールの学びや伝え方のテクニック、第３回ワークショップに向けてのオンラインでの場づくりの工夫やファシリテーションを体験しました。講座そのものがオンラインで実施されたので、学んだことをその場ですぐ活用することができました。

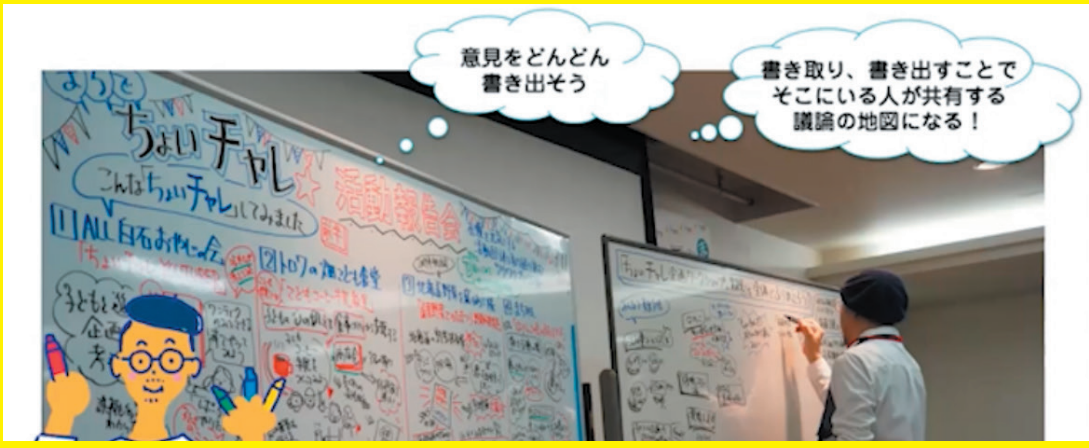
今回の講座で私が重要だと感じたのは、情報を可視化することです。図を使ったスライドを用いて説明していただいたことで、思考の整理やイメージがつけやすくなることを体感できました。スライドには重要な情報が多いにも関わらず、どこを見て欲しいのか、どこが重要なポイントなのかがはっきりと伝わってきました。

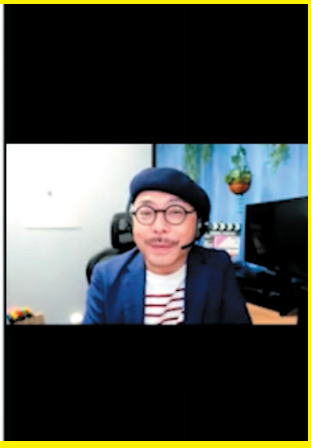
また、ワークショップの写真から、参加者の意見を図で表すだけでなく、タイトルのような「くくり言葉」にまとめることで、より簡単に全体を理解でき、時間をかけずに全体像を大きく捉えることができると実感しました。

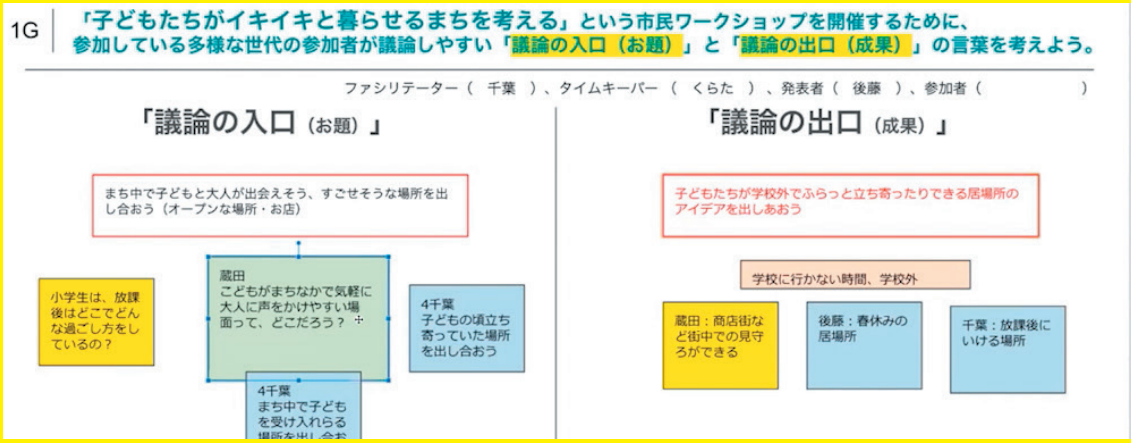
参加者が主体的に

放課後の時間の話です。参加者のひとりから、千葉さんに「メッセンジャーのようなグループがあれば…」と提案されたことをきっかけに、参加者同士が「場づくり」をはじめたのです。さらに、参加者同士が各々の情報を交換している様子も見られ、２回の講座で小さなコミュニティが形づくられているように感じられました。

私はこれまで、一般的に講座といえば、参加者が講師の話から受け身で知識を得ることを目的とした場所だと思っていました。しかし、このようなシーンに出会い、私はこの講座の機能がそれだけでないということを感じました。それは参加者同士が交流する場という意味合いとしても機能するということです。こうした機会は参加者同士の活動を共有し、応援し合い、交流の場を広げる場所でもあります。このような講座を増やすことで、地域の活性化が望まれるのではないかと考えました。（葛西）









●インターンレポーター：室蘭工業大学 工学部 建築社会基盤系学科４年　葛西 芳枝
●開催日時：2022 年 2 月 19 日　●実施場所：オンライン　●参加者：「コーディネート力」を身に付け地域で役立てたいと考えている札幌市民 16 名

2021

準備期間は半年！石デ初のオンライン・オフライン同時開催ワークショップ！
あつ祭 学びと出会いの詰め合わせ「川崎の“市民館”を考える」フォーラム

石デ、初の試み

8月23日、市民館がもっと地域の身近な存在となるよう、そのあり方を考えるフォーラムが、溝の口駅近くの高津市民館で開催されました。

コロナ渦でイレギュラーなことが多く、石塚計画デザイン事務所（以下石デ）でも初の試みとなるYouTubeやZoomも活用したワークショップ。川崎市の職員、お話いただくゲスト、市民、イベント進行役の石デの職員、オンラインでつなげるための技術担当の方々が参加。私たちインターン生は写真撮影やレポート作成、タイピング記録などを担当し、私は写真撮影を託されました。「まちづくり」という仕事現場を実際に見るのは初めてだったので、その視点から新しい発見だと思ったものにシャッターを切っていきました。

高津市民館の入口はカラフルな三角フラッグや提灯で装飾され、参加者は祭りのはっぴを着たスタッフに迎えられるなど、ワクワクする仕掛けがいっぱい。パンフレットもポップなデザインがほどこされていて、こういった雰囲気づくりに力を惜しまないのが石デならでは！と思いました。

いよいよイベント開始！

第一部の「インスピレーショントーク」では、先進的な図書館での取り組みをされている札幌市中央図書館の淺野隆夫さん、学びの資源を維持し活用していく活動をされている埼玉大学教育学部教授の安藤聡彦さんのお二方から「これからの公共施設のカタチ」についてお話を伺いました。

私が特に驚いたのは札幌中央図書館！市民図書館といえば新聞を読むおじさんの場所という印象だったのですが、そこは程よくおしゃれで老若男女を受け入れる空間でした。

第二部は、「ワールドカフェ」。会場の参加者を6つのグループに分けて「話を聞いて思ったこと」「身近な学びの場とは？」「どんな市民館なら行きたいか？」について意見交換しました。ひとつのトピックに割けるのは15分という短い時間でしたが、各グループのファシリテーターが受け止め、最後は全体に向けてグループで話し合ったことを発表し合いました。

ここでは、ファシリテーターによって進行の仕方や話のまとめ方、発表の仕方が違っていた点に興味を持ちました。椅子に座る市民と合わせて目線を低くして話を聞く方、話を聞きながら模造紙に絵や矢印を書く方、またZoomで発表される方の中には、まとめた内容をご自身の背景にした方も。発表されたときには、会場で「おおぉ」と声が上がりました。

少しずつ見えてきた、新たな市民館の“カタチ”

初めての試みということもあり、リハーサルでは回線が繋がらないなどのハプニングもありました。それでも一人ひとりが「より多くの意見を出しあおう」という意識を持っているからこその大成功だったように思います。

まちづくりに欠かせないのは、そこに住む人達の生の意見。その意見を取り入れる、一番最初のステップを見ることが出来ました。

参加者からは「ふらっと立ち寄れて交流ができる市民館になってほしい」という意見が多くありました。市民のこの声がどのように反映されていくのか、とても楽しみです！（小澤）







●インターンレポーター：東京都立大学 都市環境学部 観光科学科3年　小澤 萌子
●開催日時：2020年8月23日　●実施場所：高津市民館ホール・Zoom　●参加者：川崎市内在住、在勤、在学の関心のある方

たくさんの熱い想いが、オフライン・オンラインで白熱！
ワークショップ 2.0：新しい交流のかたち

【初】オンライン・オフラインの同時開催

川崎市の市民館の未来を考える市民参加型のワークショップが開催されました。川崎市では、これまでに市民館のあり方を考えるワークショップを重ねてきましたが、今回はオフライン・オンラインの同時開催。会場の高津市民館にいるオフライン参加者と、自宅にいるオンライン参加者を zoom で繋ぐ初めての試みです。

私はパソコンからオンラインで参加しました。第一部のテーマはインスピレーショントーク。ゲストに札幌市図書・情報館の新たなかたちを模索した淺野隆夫さん、社会教育施設に詳しい埼玉大学教育学部教授の安藤聡彦さんを招いて講演が行われ、公共施設のもつ可能性について参加者にインスピレーションをもたらしました。zoom 越しに、参加者の皆さんが頷きながら聞いていらっしゃる様子がとても印象的でした。参加している場所は遠くても、心の距離はそう遠くありません！

オンラインだからこそ生まれる交流

第二部の「ワールドカフェ」は、参加者同士の交流の時間です。オンライン参加者は zoom のブレイクアウトルーム機能を使用し、5~6 人のグループで意見交換をしました。画面越しに印象的だったのは、参加者の層が多様であること。退職後、市民活動に力を入れていらっしゃるご高齢の方が中心で、働く若い世代の姿も見られました。オンライン開催だからこそ自宅から簡単に参加でき、今まで市民活動への参加や市民館を利用する機会のなかった市民を交えた交流が生まれたように思います。公共施設である市民館は、子供から働く世代、高齢者まで様々な世代の人が一度に交流できる数少ない場所。市民館自体が、あるいは市民館を題材にしたこのワークショップのような機会が、多様な価値観を持つ人たちの交流の場となる可能性を感じました。

zoom 越しで共有　市民の熱い想い

zoom 上での交流ということで、空気が硬くなってしまうのではないかと思っていましたが、心配は無用でした。前半のフォーラムの内容を踏まえ、市民からは「集団でなく、個人でも利用しやすい」「距離的にも、心理的にももっと身近な」「働く世代にも利用のハードルが低い」「子供たちの居場所となる」市民館にして欲しい、といった想いが寄せられました。市民館をよく利用する市民、遠い存在に感じ利用に踏み切れなかった市民の双方の生の想いが、パソコンの画面越しでも熱を持って語られました。

街に、オンラインに、市民館から飛び出せ！

オンライン・オフライン同時開催のワークショップを通し、市民館を飛び出したオンラインだからこそ生まれる多様な層の交流があること、市民館の中の対面の交流だからこそ得られる幸福感もあることを実感しました。これからの市民館のあり方を考えたとき、新しいかたちとして「街中に」「オンラインに」飛び出す市民館を創造できたら、とてもワクワクします。ますます多様な層の市民交流が生まれ、多様な価値観に触れることができる場になれば素敵ですね。（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 2 年　溝口 開人
●開催日時：2020 年 8 月 23 日　●実施場所：高津市民館ホール・Zoom　●参加者：市内の活動団体・関心のある市民、この機会に関心を持つ市民

コロナ禍でも挑戦を諦めない！ NPO 法人運営やクラファンのコツを学ぼう！

カワサキコネクト～ミライのために、イマできること～

なかなか大変、コロナ禍の中の活動

2020 年 12 月、新しい生活様式が求められている昨今、NPO 法人の活動を継続させたり、支援を得るための活用法を探るワークショップが開催されました。会場の川崎市総合自治会館ホールには、NPO 法人関係者が多く集まりました。

石塚計画デザイン事務所（以下石デ）は、グラフィックレコーディングや映像関係、写真記録の大きく 3 つを担当。来場者にはマスクの着用を促すなど、感染症対策をしっかりとった会場はほぼ満席に。参加者の関心の高さが伺えるようでした。

「オンライン」「オフライン」でできること

最初に、子育て世代の方に心豊かなくらしを提案することを目的として活動している NPO 法人「みどりなくらし」理事長の堀由夏さんから、今年の活動紹介をしていただきました。コロナ禍に入ってから YouTube や Zoom を使ったイベントなどを始め、試行錯誤の中でも高評価だったとのこと。「半歩でも前に進むことが大事」という言葉が印象的でした。

続いて、高齢者や障害者、その家族をお互いに支え合い、地域に住む誰にも優しいまちづくりのネットワークを目指して活動している、NPO 法人「すずの会」理事長の鈴木恵子さん。コロナ禍でデジタル化が進む中でも、「アナログで乗り切った」そうです。3 月中に 140 枚ものマスクを作って戸別配布、安否確認・悩み相談のためにかけた電話はなんと 627 回！これには会場もどよめきました。「できないことが多い中でもできることを探して、やる」という鈴木さんのお話を、参加者もメモをしながら聞いていました。

濃度の濃い 80 分

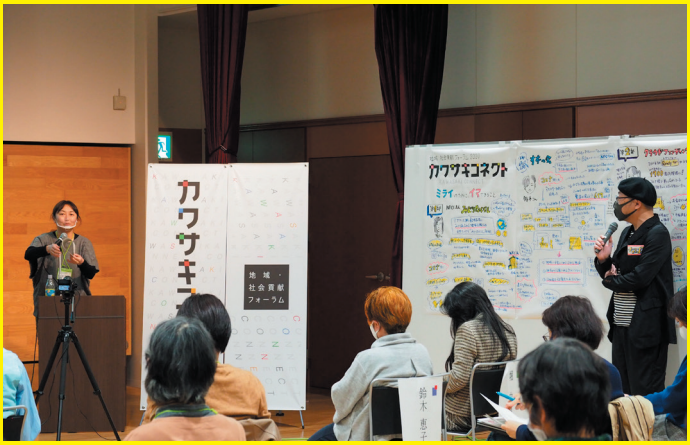
コロナ禍で急速に浸透したクラウドファンディング（以下、クラファン）。会場の熱気から、最も関心を寄せられているテーマのようでした。事業運営企画のコンサルティングを行う鎌倉幸子さんに、クラファンの基礎知識、実際に行う際の注意点を教えていただき、本番を想定したワークもありました。普段 5 時間かけて行うセミナーを、なんと 80 分に集約。この短い時間に、これからクラファンに挑戦する人を励ます名言がいくつも飛び出し、あっという間に感じられました。

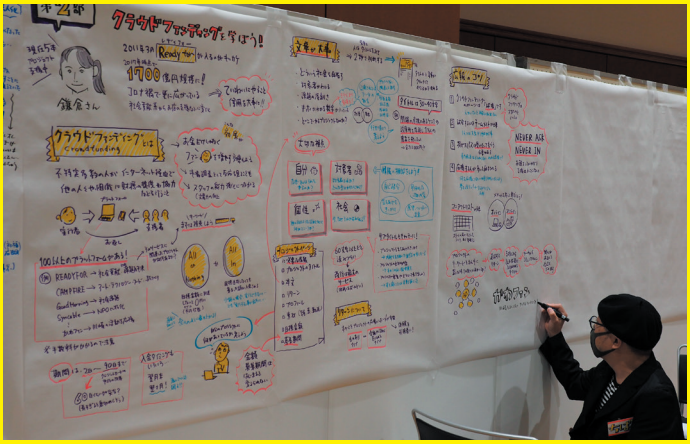
石デの腕の見せどころ！ グラフィックレコーディング！

石デの千葉さんは、登壇者の話を聞きつつ、グラフィックレコーディングを行い、会場の司会もするという一人三役をこなしていました。また今回、参加者にフルーツや花の形の付箋にこれからのアクションについて書いてもらい、木のイラストの模造紙に貼ってもらいました。こうすることで、「木を完成させるために意見を書こう・ちゃんと参加しよう」と参加者に自ずと意識させる、ユーモアのある工夫も。ワークショップ終了後も、模造紙の前に参加者が集まり、感嘆の声が上がっていました。

今回のイベントを受けて、これから川崎ではどのような活動が生まれるのでしょうか？　川崎市のクラウドファンディングサイト「かわファン」にも、期待が高まります！（小澤）







●インターンレポーター：東京都立大学 都市環境学部 観光科学科 3 年　小澤 萌子
●開催日時：2020 年 12 月 13 日　●実施場所：川崎市総合自治会館 ホール　●参加者：活動する仲間を増やしたり、資金集めに関心のある地域活動団体

コロナ禍でのコミュニティ活動を考えよう

まちのひろばフェス 2020 これからのコミュニティ活動を考える～ with コロナ、after コロナ～

対面（リアル）とオンラインの同時開催

多様なつながりを育む地域の居場所である「まちのひろば」について知り、これからのコミュニティ活動を考える「まちのひろばフェス 2020」。2020 年は新型コロナウイルスの影響で対面によるつながりづくりが難しくなり、多くの方が戸惑いを感じていると思います。しかし、そんな状況下でも新しい手段を探し、コミュニティ活動を続けている方々がいます。

今回の「まちのひろばフェス」では、そんな方々のお話を聞き、新しい生活様式に沿ったつながり方を一緒に考えていくことになりました。今回は、３密を避けるために、対面（リアル）とオンラインの同時開催という新しい形で行われました。114 名の参加者のうち、来場者は全体の３ 割、オンラインでの参加者は７割（YouTube 含む）に。

コロナ禍でもコミュニティ活動はできる！

第一部では、NPO・企業・サークル運営者等へのセミナー・コンサルティングを多数提供する NPO 法人 CR ファクトリーの呉哲煥（ご・てつあき）さんによる講演会が行われました。

コロナ禍の折、リアルなイベントやミーティングができない、高齢者の感染に気をつける必要がある、IT・オンラインの得意・苦手の差といった問題が起きています。呉さんは市民活動の場での戸惑いの声を聞くなかで、形を変えてもコミュニケーションを続けること、自分たちの根本を見つめ直すこと、中長期的視野に立つことが重要だと考えているそうです。

参加者の方々からは、「悶々と悩む中で今回のイベントでは少し光が見えた」「新しいやり方にチャレンジしていく必要性を感じた」などの感想をいただけました。また、オンラインによって市民活動が進化することもわかり、僕自身も、この状況を前向きにとらえることができました。

オンラインによるコミュニティ活動の新しい形

第二部では、「Vege&ArtFes」の中村ふみよさん、大規模マンションで居住者が一体となって防災に取り組む「オーベルグランディオ川崎自治会」、まちのひろばづくりに取り組む「川崎市職員 PJ チーム」のメンバーも加わってトークセッションを開催。

中村さんは、川崎の農家やママ起業家、商店と一緒にワークショップ、川崎野菜の販売等の活動を行なっています。お話を聞いて、マルシェやマンションでの活動、まちのひろばづくりなど、コロナ禍でもオンラインを活用することで様々な活動ができることがわかりました。どの方々も新しい活動の形を作り上げている様子。オンラインという慣れない環境で、手探りながらも活動を続けていきたいという熱い思いが感じられました。フェス終了後にはオンライン体験会も行われ、オンラインでの活動の手段を学べる場にもなりました。また、今回のフェスは YouTube にアーカイブが残っており、参加できなかった方も見ることができるようになっています。

このフェスを通し、コロナ禍での活動に悩んでいた参加者の方にとって「何かできることがある！」という気持ちが高まる場になったのではないかと思います。（浅野）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科４年　浅野 秀矢
●開催日時：2020 年 11 月 1 日　●実施場所：川崎市総合自治会館 大会議室　●参加者：地域コミュニティや市のコミュニティ施策に関心のある方

授業から飛び出せ！高校生のアイデアでまちづくり通信を発行しよう

元石川高校アントレプレナーシップ　スピンアウト企画

自らの手で、通信をかたちに！

神奈川県横浜市の元石川高校で、現役高校生の皆さんと「次世代郊外まちづくり通信」の制作に向けたワークショップが開催されました。元石川高校では、企業家精神を育む「アントレプレナーシップ」という授業の一環で、「次世代郊外まちづくり通信」を発行する横浜市・東急株式会社とタッグを組み、高校生に「手に取ってもらえる」「まちづくりに参加してもらえる」通信づくりに取り組んできました。

授業では高校生が考案した通信を大人たちに提案することがゴールでしたが、今年度で 2 回目の開催となるスピンアウト企画は、実際に通信を発行しよう！というもの。アントレ受講者のうち、実際に通信をかたちにしたいという熱意を持った生徒たちが集いました。

通信を発行するまでには数々の行程がありますが、今年は感染症の影響により限られた時間で進めなければなりません。今回の WS では、完成に向けて大きくステップアップするために、通信のデザインや内容のアイデアを出し合い、皆で完成イメージを共有しました。

高校生の目を惹くには？リアル世代から湧き出るアイデア

通信をつくる上で大切なのは、読者をイメージすること。「ターゲットとなる高校生に読んでもらうには」「読んだ高校生にどう変わって欲しいか」を想像しながら、通信のデザインや内容のアイデアを出していきます。「高校生が興味のある昭和レトロをデザインの基調とする」「マンガ形式で内容を展開する」「学校から駅までの道にあるお店や、たまプラの歴史を紹介したい」などのアイデアが生まれました。

私が驚いたのは、高校生のアイデアの豊富さと具体性。次から次へとアイデアが飛び出してきます。そして、そのそれぞれがとても具体的！「高校生に親しみを持ってもらいつつ、お洒落なデザインにしたい。そのために丸みを帯びたフォントや手書きの文字を取り入れる、同系色の色で揃える」といったアイデアも出されました。

侮るなかれ、高校生のデザイン力

アイデアを出し合って通信の完成イメージを共有したのちは、表紙や裏面のデザインを担当する「デザインチーム」、内容の取材や文章を担当する「コンテンツチーム」に分かれ、具体化に向けて始動しました。大人が介入せずとも、生徒主体でどんどん話が進んでいきます。デザインチームの生徒は、今までに目にした雑誌やチラシから学んだデザイン要素を意識しつつ、ターゲットとなる高校生の目を惹く表紙デザインを試行錯誤。親しみやすくも洗練されたデザインにしようとする高校生のこだわりを感じました。

大人が高校生向けにデザインしようとするとポップになりがちな印象がありますが、参加生徒たちが求めているのはもっとスタイリッシュなデザインでした。高校生の趣向 を大人が決めつけてはいけません！

今回の WS を通してイメージがグッと具体化したまちづくり通信。高校生が高校生に向けてつくる通信がどんなかたちになるのか、楽しみでたまりません。（溝口）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 2 年　溝口 開人
●開催日時：2020 年 3 月 11 日　●実施場所：神奈川県立元石川高等学校　●参加者：アントレプレナーシップに取り組んだ元石川高生の参加希望者

2016

まちづくりにおけるファシリテーターの役割とは？

川崎市 地域コーディネーター研修 基礎研修編

緊張の中はじまった午前の部

今回のワークショップテーマは、「協働のまちづくり」。市民自治の視点や住民の先見性、行政の限界についての観点から事例を学びます。まず、まちづくり新時代の岐路に立つ区役所職員の現状への理解と、それに対応する必要性が説かれました。職員は、真剣な面持ちで聞き入っていました。

その後、市民文化局コミュニティ推進部協働・連携推進課から、「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」について説明がありました。歴史を背景に、今後どのように捉えるべきか「希望のシナリオ」を手に皆で考えます。地域・区域・市域の各レベルでビジョンが描かれ、区域で課題解決ができるよう市民が主体となって地域活動を行い、地域の価値を創出すること。今、職員にコーディネーター力が求められていること。石塚計画デザイン事務所の千葉晋也氏は、「行政の仕事の仕方にとらわれない新しい発想でコミュニティに関わる視点をもっていただくために今回の研修がある」とまとめました。

コーディネーターは、地域の特徴を把握しなければなりません。実際にデータを活用してチャート作成を行うと、職員たちの顔つきが変わりました。制限時間ギリギリまで真剣に討論が行われ、「こうできたら良いまちになる」など、ポジティブな意見も多く見られました。

グループワークを実践

午後は、石塚計画デザイン事務所が関わった事例をもとに地域課題の見つけ方を学び、課題を「見える化」して解決方法を探りました。模擬ワークでは、千葉氏自らファシリテーターとなり、希望者 6 人とグループワークを実演。なかなか希望者の手が挙がりませんでしたが、「誰もいないのなら私が」と数名の勇者によりワークがスタート。進行を円滑に進めるコツや紙に意見をまとめるノウハウを学びながら、グループの 6 人から川崎市の魅力について様々な意見が飛び出します。会場からは、ときに笑いも起こりました。

次に、プロッキーの使い方を教わり、実際に手を動かします。皆さん苦戦しつつも楽しそう！氏名を書いて皆で写真撮影し、意見をまとめる「くくりの言葉クイズ」で頭を柔らかくしてから、ワークを実践。個性溢れる内容がしっかりと整理され、皆さん自信に満ちた表情で発表していました。

ファシリテーターの継続的な学びを

初めてファシリテーターを体験した研修生。最初は消極的に見えましたが、最後に書き上げた台紙を拝見すると皆さんお見事！コツさえつかめば、誰もがファシリテーターになれるのかもしれません。インターンとして参加した私も上手にできるか不安でしたが、ワークを終えて少し自信がついたようです。グループワークなら、一人で考えるよりもずっと多くのアイデアに触れることができ、ワークショップを行うことで、さらに良いまちが目指せるのかもしれないとワクワクします。

今回は書き方・まとめ方が重視されましたが、ファシリテーターの受け答えによってアイデアの深まり方が異なるため、継続的な学びが必要だと思いました。（秋元）







●インターンレポーター：東京都市大学大学院 環境情報学研究科 都市生活学専攻 修士 I 年　秋元 友里
●開催日時：2019 年 6 月 3 日 / 13 日　●実施場所：市役所第 4 庁舎 2 階第 I・2 研究室　●参加者：係長級以下の区役所職員 50 名

地域のリアルな課題に真剣に向き合うことで、より現実的な研修に

川崎市 地域コーディネーター研修 ステップアップ研修編

実際に地域が抱える課題と３ヶ月間向き合う研修

今年度の川崎市「地域コーディネーター研修」の目的は、地域の課題解決の現場でのスキルアップ。地域に関わる多様な部署の若手職員を対象に実施されました。今回は中原区の町会の協力を得ることができ、町会が実際に抱える課題を扱い、リアルなプロジェクトのように進行していきました。

研修は、８月から１１月の約３ヶ月に渡る全４回。１日目に実際に現地を歩いて町会の特徴や抱える課題の整理を行い、２日目は町会の方々や民生委員の方々から地域についてのヒアリングに挑戦しました。そして、３日目にそれらの活動から得た情報をもとに提案を考えるワークを行い、最終日に町会に提案を発表しました。

講評には町会長だけでなく、中原区長、現場を担当している保健師にも来ていただき、様々な角度から意見をいただきました。長期間実施し、研修時間外にもグループメンバーで連絡をとり合ったことで、内容の濃い研修になったと思います。

提案内容を聞いていると、地図を見るだけではなく実際に歩いて移動スーパーが実施できそうな場所を見つけてくるなど、ただの研修の課題ではなく実感として地域課題を受け止めていることが伝わってきました。研修の一環として学んだファシリテーションやグラフィックスなど、自分のスキルで、アイデアの魅力や実現のための検討を伝えようとする工夫も見られました。

地域に対する熱い想いがぶつかり合う

提案されたアイデアに対して、町会長は「既に検討済みのアイデアです」「この部分は取り入れることができそうです」など真剣にフィードバックしていました。職員側も、それに対して「この提案は今までに実施されたであろう試みとこう違います！」などと最後までグループで考えたアイデアの魅力や強みを伝えており、熱意のこもった応酬の中で、意見がさらにブラッシュアップされる場面もありました。

提案にはヒアリングから得た生の声が反映されていたこともあり、議論の焦点も具体的で、明日から取り組めるアイデアも多く生まれていたようです。私自身、地域について真剣に向き合う場に立ち会う事ができてよかったと強く感じました。

リアルに触れた職員の変化も

アイデアの提案終了後は、職員のみで簡単に振り返りを行いました。「地域に入る部署に所属しており、大変だったがこういった経験ができたのは今後の仕事に活かせそうだ」など前向きな意見が多く挙がりました。また、「よく考えてみると、自分だったら提案したイベントを行っても参加しないかもしれないと感じた」など、課題として取り組んでいたものをジブンゴトとして捉えた時の意識の変化を聞くこともできました。

このまちは既に多くの取組みをしている地域ということもあり、新たな提案をするのは大変だったと思います。しかし、終了後の表情からは達成感を感じ取ることができ、この研修を通じて得たものも多かったのではないかと思いました。（小田）







●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士１年　小田 史郎
●開催日時：2019 年 8 月 8 日～ 11 月 15 日　●実施場所：井田地域生活支援センターはるかぜ　●参加者：川崎市区役所等の職員

あたらしい市民館・図書館をさらにワクワクする場に！

新たな市民館・図書館に「引き継ぎたいこと」「期待すること」を出し合おう

多様なメンバーで考える新しい市民館・図書館

2025 年 ~2026 年度に鷺沼駅周辺に移転・整備される予定の宮前市民館・図書館について、市民みんなで期待することや将来像を考えるアイデアワークショップの第 I 回が実施されました。

鷺沼駅周辺の環境や、これまでのプロジェクトの経緯などについて市の職員からオリエンテーションが終わると、グループワークに移行。はじめは緊張しているように見えた方も、ワークショップが始まると、ご自身の考えを積極的に発言していました。中には大学生や高校生の方も参加されていて、社会人にも負けないくらいの熱量で、市民館･図書館に対する想いを語っている姿がとても印象的でした。

今の市民館・図書館への想いを語りあって

I つ目のテーマは、現在の市民館・図書館の“気に入っていること”、“改善したいこと”。はじめは躊躇しているように見えた方も、他者の意見を聞いて「たしかに！」と頷いたり、「そういえば！」とバトンを引き継ぐ形で意見を出しあったりもしていました。

小学生のグループからもたくさんの意見が出ており、「これについて書いた人？」とスタッフが聞くと「はい！」とたくさんの手が挙がっていました。とりわけ”気に入っていること”を語り合っているときは、「あのイベント楽しいよね！」などと笑顔で友達と話しており、和気藹々とした雰囲気で進んでいきました。

こうなったら嬉しいな、をみんなで考える

次のテーマは“こんな市民館・図書館になったらいい”というアイデアや“期待すること”。ここでも小学生は大活躍！「寝転がって読めたらいいのにね！」など、大人では考えつかないような楽しいアイデアがたくさん飛び交いました。

社会人のグループも負けておらず、これまで話し合った内容を踏まえて、アイデアを続々と生み出していました。市民活動が盛んな宮前エリアらしく、“市民活動を支える仕組みや場がほしい”“様々な使い方ができる広場”など、市民館・図書館の今までの枠組みを超え、自分たちに合った市民館・図書館のかたちを考えていたようです。各グループから出た意見は、どれもワクワクするものばかりでした！

楽しいアイデアにみんなワクワクする

グループワークを終え、次はいよいよ発表の時間。たくさんの参加者の前で発表するのは緊張しそうだなと思いながら見ていましたが、むしろ「多くの方に伝えたい！」という気持ちが伝わってくるほど、どの方も堂々と楽しそうに発表されていました。「あ､ここもう少し話したい！」という声が上がったり､「たしかにいいなぁ」という声が会場から聞こえたりと、話し合ったアイデアを、みんなでワクワクしながら共有する良い時間になったと思います。次のワークショップでは、今日登場したアイデアを、より具体的な形に深めていきます。一体どのような形で実現に向かっていくのかとても楽しみです！（小田）







●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士 I 年　小田 史郎
●開催日時：2019 年 9 月 7 日　●実施場所：宮前市民館 大会議室　●参加者：宮前区に住んでいる方々

“自分ごと”として考える、みんなが使いたくなる場

みんなでつくる、あたらしい宮前市民館・図書館ワークショップ

多様な視点で考える、未来の市民館・図書館

2025年～2026年度に鷺沼駅周辺に移転・整備されるあたらしい宮前市民館・図書館を、みんなで考えるワークショップ。私は第2回に参加しました。10代から70代まで多様な約50名が集まり、第1回の参加者が出し合ったアイディアを深めます。早くから多くの方々が会場に集まって談笑する和やかな雰囲気のなか、ワークショップが始まりました。

まずは、第1回の振り返り。現在の市民館・図書館の改善したいことや気に入っていること、あたらしい市民館・図書館に求めることなどを確認しました。次に、未来へのイメージをふくらませるために、「武蔵野プレイス」はじめ、各地域で愛され、新しい活動を生み出している市民館や図書館の事例を伺いました。どれも既成概念を超えるものばかり！メモをとりながら熱心に聞いている皆さんの姿がとても印象的でした。

どんな市民館・図書館になってほしい？

イメージがふくらんだところで、グループワークへ。“地域とつながる”“文化・教養・ビジネスを生み出す”“情報の収集・発見・集積”をテーマに、グループにわかれてアイデアを出し合います。こどものグループは、“宮前の好きなところ”を出し合い、自らテーマを考えました。「緑が多く自然が豊か」「梨園が多い」など、私も宮前の魅力を知ることができました。なかでも、「坂が多いから運動ができて長生きできる！」という意見に、少し見方を変えるだけで、まちの課題が魅力や資源に変わることを教えてもらいました。

次に、たくさん登場した意見の中から、特に大切にしたいものを絞り込み、提案につなげていきます。実現したいことを、「誰が？」「どこで？」「どのように？」と掘り下げて考えることで、実現につながりやすく、具体的な提案になるようです。地域に住む多様な技能や趣味をもつ人々など、地域資源の発見にもつながるようでした。

いよいよ、夢を実現するための提案の発表！

続いて、グループで話し合った提案を発表。「多様な人が使いたくなるお手本となるバリアフリーの図書館」や「地域のスキルを持った人たちがつながれる講座」、「自然を感じながらリラックスできる空間」など、わくわくするような意見がたくさん！　他のグループの発表を聞きながら、頷いたり笑ったりしながら、期待に胸をふくらませているようでした。最後に、「特に大切にしたい」と感じた提案にシールを貼って投票。皆さんの思いがまとまりました。

その地域に住み・働き・学ぶ、皆さんならではの視点から、“自分ごと”としてその地域の人々のための場所を考えていく面白さや大切さが伝わってくるワークショップでした。協働してアイデアを出し合ったことが、これからも地域のことを考え、行動していくきっかけになったのではないでしょうか。宮前のあたらしい市民館・図書館は、みんなに愛され、新しい活動やつながりを育む、地域になくてはならない場になりそうです！（増田）







●インターンレポーター：首都大学東京 都市環境科学研究科 都市政策科学域 修士1年　増田 里奈
●開催日時：2019年10月5日　●実施場所：土橋小学校　●参加者：宮前区に在住、在勤、在学の10代から70代の市民47名

住み手の想いと作り手の想いがあふれるワークショップ

Fujigaoka Workshop2019 vol.2

藤が丘はこれからどうなっていくんだろう？

藤が丘駅前地区の再整備について、2019年1月に開催された第1回目に続き、2回目のワークショップが開催されました。前回の参加者による意見をもとに、今回は、再整備の基本的な考え方を共有しながら、住民と「こんな使い方ができたらいい」という意見やアイデアを出し合いました。

参加者は、10代～80代。その多くが、自分の住んでいるまちがこれからどのようになっていくのか、不安と期待が入り混じったような顔つきで聞き入っていました。藤が丘駅周辺は、区内の田園都市線7駅の中で人口密度が最も高く、賑やかなエリアです。一方で、駅への送迎にくる一般車の駐停車問題、住民の高齢化やショッピングセンター・病院の老朽化の問題があり、再整備の必要があると言えます。事業者の方が再整備のイメージについて各テーブルで紹介している際にも質問が多く飛び交い、参加者の藤が丘地区への熱い想いが伺えるようでした。

再整備についてもっと知ろう！

グループワークでは、再整備について良いと思ったところ、気になったところについて多くの意見が集まり、立ち上がってテーブルの上の地図を指差しながら話し合う場面も多く見られました。「ここはどうなるの？」「ここってこうなった方がいいんじゃない？」など多くの意見が寄せられる中、事業者の方が一つ一つの意見に向き合い、丁寧に説明する様子に、「少しでも住民の方に納得していただける計画にしよう」という姿勢が強く表れているようでした。

藤が丘らしさと、これからの藤が丘

休憩を挟んで、次に“駅周辺のミライのシーン”や“あったら良いなと思う場”について意見を出し合いました。

藤が丘は、昔から豊かな緑と落ち着いた街並みで住民から親しまれてきました。「歴史を尊重した整備を行ってほしい」「藤が丘らしさを損なわないでほしい」といった地元愛が感じられる発言が多く、藤が丘という地域が住民の間でどのように捉えられているのかを、私もより深く知ることができました。また、「今の藤が丘はお店がすぐ閉まってしまうからもう少し夜遅くまで遊べるまちになったらいいよね」「もっと魅力があふれてここで住みたい！と思う人が増えたら良いよね」といった、再整備を機にまちがより活性化することへの期待が感じられる意見も登場していました。

藤が丘のこれからをつくっていきたい

各グループで出た意見を並べてみてみると、再整備に伴う心配や不安も多くある一方で、藤が丘の良さがもっと増えてほしいという前向きなものも多かったようです。

また、今回のワークショップが、自分の住むまちについて考えるきっかけとなったのではないかと思います。今後計画が進んでいく中で、住民と事業者双方の想いがどのように形になっていくのか楽しみです。（小田）







●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士1年　小田 史郎
●開催日時：2019年9月8日　●実施場所：横浜市藤が丘地区センター 中会議室　●参加者：藤が丘地区に住んでいる方々

みんなの「やってみたい」を形にする

まちのがっこう祭をみんなでつくろう！準備会議①

みんなで考える「まちのがっこう祭」

南町田に、自然とにぎわいが融合する新たな拠点を創り出すため、2016年度から開催されてきた南町田拠点創出まちづくりプロジェクト。2017年から3年間かけて「○○のがっこう祭」という名前で市民参加による企画を進めてきました。今年は、まちびらきを盛り上げるため、新しい鶴間公園で「まちのがっこう祭」を開催。9月の3連休の初日、「セミナープラス南町田」で開催のための準備会議が行われました。

子どもからご年配の方々が参加し、「まちのがっこう祭」やこれからの鶴間公園、南町田を盛り上げていくアイディアを出し合い、具体的なイメージを考えました。みなさんが参加された動機も、「まちのがっこう祭に出展する」、「出展はしないけれど一緒にがっこう祭を盛り上げたい」、「南町田でやってみたいことがある」など、様々。年代や動機は違えど、ワークショップを通して、自分のアイディアを形にしていくことに期待感を抱いている様子が垣間見られました。

大きな地図に、みんなの想いをのせる

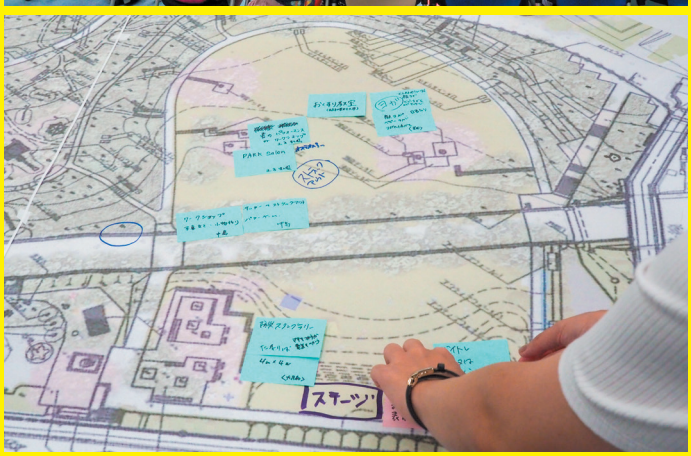
プロジェクトや「まちのがっこう祭」の説明を経て、全体意見交換が行われました。参加者全員でつくる大きな1つの輪。その中央に鶴間公園の大きな地図がおかれ、一人ひとりの「やってみたいこと」が記されていきました。皆さんで、「普段の活動」、「がっこう祭で実現したいこと」、「南町田でやってみたいこと」などを発表し、他者の発表にも真摯に耳を傾けているようでした。50人を超える参加者一人ひとりの想いを聞き、地図に記していくため時間もかかり、大変な作業ではありましたが、その分、出来上がったときの感動もひとしお！ひとつの大きな地図は、皆の夢や想いの詰まった、わくわくするものになりました。

一緒にがっこう祭を盛り上げる仲間との交流

全員で具体的な「がっこう祭」のイメージを確認したあと、「子ども向け」、「音楽」、「飲食」、「展示・体験」、「ものづくり」、「スポーツ」、「物品販売」、「その他」の8つのテーブルに分かれて、アイディアを形にしていきます。各テーブルに1～2人ずつ入ったスタッフに、実際に出展するにあたっての悩みを相談し、出展計画書を記入。自分のアイディアを実現するために、どんなものが必要か、どんな場所が最適かなど、スタッフとだけではなく、同じテーブルに座る人とも相談しあいながら出展計画書を作成していきます。その交流によって、一人では考えつかなかったアイディアが浮かんだり、悩みを共有できたりと、それぞれの想いはより素敵なものになっていったようです。

最後に、再び全体で情報を共有し、第2回目の準備会議につなげてワークショップを終えることができました。「まちのがっこう祭」がどんなものになるのか、漠然としていたイメージが、今回のワークショップを通じて様々な人の想いが重なり合い、少しずつ動き出していく様子に、参加者のみなさんのわくわくする気持ちはさらに高まったのではないでしょうか。私自身、がっこう祭への期待がふくらみました！（大橋）







●インターンレポーター：津田塾大学 学芸学部 国際関係学科3年　大橋 朋実
●開催日時：2019年9月14日　●実施場所：セミナープラス南町田2F ホールA・B　●参加者：まちのがっこう祭に運営側として関わりたい方々

未来へつなぐ、植樹祭

南町田グランベリーパーク 鶴間公園の「植樹祭」

ドキドキワクワクのまちびらき

「南町田グランベリーパーク」のまちびらきまで半月を切った 10 月 27 日、プレイベント第一弾として「植樹祭」が行われました。鶴間公園のみどりに関心のある市民に向けてまちびらきの前に公園の植樹を一緒に行うことで、公園のみどりの状況を共有しながら、これからも公園のみどりを育むサポーターとしての気持ちを育てようと企画されました。

集まってきたのは、85 人のガールスカウト、2018 年の「苗木づくり大作戦」参加者をはじめ、鶴間公園のみどりに関心がある住民 300 名。あいにくの曇り空でしたが、できあがったばかりの公園にはじめて入りウキウキしている子供たちへ、石塚計画デザイン事務所・千葉氏の「おはようございます」の挨拶から、元気にイベントが始まりました。

次世代へと繋ぐ、植樹祭のストーリー

今回は、講師に「街の木を活かすものづくりの会」代表の湧口善之氏を迎えました。2019 年、巨大台風の相次ぐ接近のために、倒木など木が私たちの生活に及ぼす危険性が高まっていることや、ごみ同然のように大木が積まれている日本の木材の現状をふまえて、今後どのようにまちと木が関わってゆくべきか、みんなで考えます。湧口氏の熱い想いは、公園の緑と都市が繋がる南町田グランベリーパークの構想とも重なり、今後のモデルとして大事な 1 ページを刻みます。そんな想いを反映してか、曇り空はみるみる晴れていきました。

さらに、2018 年のイベントでつくった苗木を持ってきてくれた 2 組の子どもたちが「水やり頑張りました！」「台風で倒れないか心配だったけど大丈夫だった！」と発言。子どもたちの努力により 1 年前の苗木がまた未来へと繋がったことに、会場は拍手に包まれました。今回のイベントでは、公園のデッキの中に、新たにオオシマザクラを植樹します。町田市役所公園緑地課の職員が、同じ東京都である伊豆諸島の大島町から船便で送られてきた桜の道のりを語りました。

お待ちかね！植樹体験

デッキでは、オオシマザクラの植樹がはじまりました。東京綜合造園の方の「みんなで植えていきましょう」のかけ声を機に、ステージへ上がるガールスカウトたちや地域の子どもたち。「オオシマザクラの花は白っぽい色」との説明があると、「開花が楽しみだね」という声が溢れます。好奇心いっぱいの子どもたちからもたくさん質問があがり、木への思いが深まっていったようです。みんなで丁寧に土を被せ、木の名前が書かれたプレートを巻きつけて終了。素敵な花が咲くのが待ち遠しいです。

30 分ほどで全ての植樹を終え、みんなでおやつ休憩。声をかけると、「楽しかったー」とのうれしい反応に、未来へと繋がる取り組みをみんなで楽しんでできたことに、私も改めてこのイベントの価値を知ることができました。丁寧にみんなで植えたからこそ、公園を大事に使うきっかけが生まれ、「またここに戻ってきたい」と思わせてくれるのでしょう。素敵なイベントに参加することができ、うれしかったです。（秋元）







●インターンレポーター：東京都市大学大学院 環境情報学研究科 都市生活学専攻 修士 1 年　秋元 友里
●開催日時：2019 年 10 月 27 日　●実施場所：鶴間公園　●参加者：鶴間公園のみどりに関心のある地域の方々、ガールスカウト

みんなでつくった、ひとつの「まちのがっこう祭」

南町田グランベリーパークのまちのがっこう祭

終日あたたかな雰囲気につつまれた鶴間公園

11月初めの土曜日、晴天の下、2019年「南町田グランベリーパークのまちのがっこう祭」が開催されました！　11月13日にオープンする「南町田グランベリーパーク」を一足早く体感するため、新しい鶴間公園にたくさんの人が集まりました。様々な企画とともに、公園全体にまちの皆さんの楽しそうな声と笑顔が花開きました。キッズランやタグラグビーが行われ、一日中子どもたちの元気な声が響いた運動広場。道に並んだ屋台の美味しそうな匂いと「がっこう祭をどう楽しもうかな」とわくわくする来場者の皆さんの声で賑わっていた水道みち。ステージから奏でられる素敵な音楽と、まちのみなさんの間で育まれるたくさんの会話で盛り上がった広場。終日、がっこう祭は温かな雰囲気につつまれました！

新しい施設とまちの人の距離をぐっと近づけた「ウッドブロックワークショップ」

そんな中、私は、鶴間公園の木でつくったウッドブロックを加工し、「パークライフ・サイト」内のパークライフ棟のエントランスの壁面をまちのみんなで仕上げる「ウッドブロックワークショップ」のお手伝いをしました。受付が開始されるやいなや、長蛇の列！　多くの方が、自分で加工したウッドブロックが新しい南町田グランベリーパークの一部になる魅力を感じられたのか、大人気の企画となりました。

列に並ぶ間、近くの方と「自分たちで削ったウッドブロックがどんなふうに壁の一部になるのかな」とコミュニケーションを交わすことで、参加者の皆さんの、「新しいまちの一部を自分たちの手でつくるんだ！」という気持ちはますます高まるばかり！　「どの種類の木がいいかな」と、ウッドブロックを選ぶところから、「パークライフ・サイト」内のパークライフ棟に貼りつけにいくところまで、終始、参加者の皆さんのわくわくする様子が見受けられました。

今回のワークショップを通じて、参加したまちの皆さんにとって、新しい「南町田グランベリーパーク」は、単なる商業施設ではなく、新しいまちの一員として親しみのある存在になったと思います。

まちのみんなでつくりだす「まちのがっこう祭」

イベント中、来場者同士で新たなつながりを楽しむ姿や、出展者同士でお互いの企画を楽しむ姿がたびたび見られ、出展者と来場者という垣根を超えて、想い想いに楽しむ様子が印象的でした。出展者の皆さんの企画だけではなく、来場者の皆さんが、どんなふうに公園で過ごし、企画を楽しみ、まちの人と会話をつむぐのかということも、ひとつの「がっこう祭」をつくるための大切なピース。まちのだれかではなく、まちのみんなでつくったイベントであったからこそ、最後に「来年もやりたいな」、「また来たいね」、「来年は出展してみようかな」という声が聞こえたのではないでしょうか。そして、いつかこの日を振り返った時、大変だったことやうまくいかなかったことが失敗や後悔ではなく、温かな思い出の1ページとして刻むことができるイベントになったように思います。（大橋）







●インターンレポーター：津田塾大学 学芸学部 国際関係学科3年　大橋 朋実
●開催日時：2019年11月2日　●実施場所：鶴間公園・パークライブサイド　●参加者：「まちのがっこう祭」ブース出展者、来場者、当日ボランティアの方々

暮らしている人々がまちをつくっていく

新田西部地区のコミュニティのミライを考える地区別懇談会

３年がかりの行動計画づくり

草加市で暮らす人々と行政が協力して地域課題解決のための行動計画を３年かけて作り上げていく「コミュニティプラン」。１年目「将来像とプロジェクトテーマを描く」２年目「プロジェクトを企画する」３年目「仕組みを考える」という段階を踏んでつくっていきます。ここで選ばれたモデルプロジェクトはお試し実践もします。

今年は２年目。新田西部地区では昨年、地域福祉のこと、商店街や駅前の賑わいのこと、子育てのこと、子どもの遊び場のこと、多世代交流のこと、防災のことがプロジェクトテーマとして選ばれ、今回はこれらを４グループに分かれて振り返りながらプロジェクトを具体化していきました。

まちの課題はマジでむずかしい

地域福祉を考えるチームでは本当に難しい問題も。高齢者の孤立防止のために、地域の方々が普段の生活の中で支援を必要とする高齢者の発見や見守りを、ボランティアで行う見守りネットワークという仕組み。実際この活動を行っているのは高齢者で、老々見守りの状態。見守り者が明日見守られる側になってもおかしくない状況です。若い人は仕事が忙しいし、最近では 70 歳まで働く人が多いため、人材不足で活動の継続が危ういそう。深刻な問題です。理想と現実の差が大きく、なかなかいいアイディアが生まれません。そんな難しい場面でも、チームにいるファシリテーターは丁寧に話を聴き、問いを投げかけ、メンバーのプロジェクトを具体化まで導こうとします。今回の懇談会のルールとして掲げられていた始めの一歩を踏み出すために大切な考え Light（簡単に）、Quick（早く）、Cheep（安く）を思い出しながらみんなで想いを譲り合えるところまで譲り合い、自分たちで実行できるレイヤーまで手繰り寄せていきました。課題がどんなに大きくても、始められなければ意味がないですよね。

最適なまちは自分でつくる

最後に各グループで取りまとめたグループワークの成果を全体で発表して共有します。どのグループの課題もどの街でも起こりうるような難しい困りごとばかり。しかし、誰かに頼むようなアイディアではなく、このまちに住む自分たちから変えていこうとするアイディアが多く生まれていました。今年度は全３回あり、今回は１回目。これからどんどんブラッシュアップされていきます。

まちというものは幻想で、私やあなたが住んでいるということだけが事実です。誰かに頼むのではなく、住んでいる自分が考えていくことでしか、本当に自分たちにあったまちづくりはできないんだろうなと学んだ回でした。（西川）







●インターンレポーター：社会人インターン　西川 理奈
●開催日時：2019 年 8 月 27 日　●実施場所：勤労福祉会館 I 階ホール　●参加者：地域住民、地域団体の方々

80 1/2

子どもたちと考える未来のたまプラーザ

わたしの住みたい粘土のまち“青空が丘のくもプラーザ”ワークショップ

子どもたちが想い描く未来のたまプラーザ

横浜市青葉区のたまプラーザにある「PEOPLEWISE CAFE」。ここで、たまプラーザに住む１～３年生の子どもたちに“自分たちが住みたい未来のたまプラーザ”を想い描いてもらいました。この日行ったのは、粘土でつくる「わたしの住みたい粘土のまち“青空が丘のくもプラーザ”」ワークショップです。

まずは子どもたちが一人ずつ自己紹介をして緊張をほぐし、くもプラーザの紙芝居を見てもらいました。くもプラーザのイメージがついたところで、より具体的に想い描いてもらうために、どんな人が住んでいるのか考えます。そしていよいよ、粘土で形づくり。「PEOPLEWISE CAFE」にあるまちの模型を５つのブロックに分けて一人１ブロックずつ担当し、それぞれが粘土で住みたいまちをつくっていきました。最後は一人ひとりが自分のつくったまちをみんなに発表して、それぞれの作品を合体させて“青空が丘のくもプラーザ”の完成です。

一人よりも、みんなでやるほうが楽しい

参加者が少ないこともあり、最初は「時間内に終わるかな」と心配していたのですが、いざはじまると子どもたちの手は止まりません。まわりで見守っていたお父さん、お母さん、そして私たちスタッフも入り混じってわいわいと盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。白い粘土でくもを表現したまちはどんどんにぎやかになっていき、個性あふれる素敵な“くもプラーザ”のまちができあがりました。親子で「何つくってるの？」「美術館だよ」というような会話を交わしたり、協力してつくったりしている様子は微笑ましかったです。

また、頭で考えているだけよりも手を動かすことで、まちを考えることがもっと楽しくなります。他の人が持っている材料を使ってみたり、つくっているのを見てマネしてみたり、１人では思いつかなかったものが生み出されるのもワークショップの面白さだと実感しました。

子どもたちの感性がミライのまちを教えてくれた

普段、自分たちの暮らしを振り返る機会はなかなかないと思います。今回のワークショップをきっかけに、子どもたちが自分たちの住むまちのことを見直して、より良くしたいと考えるようになってくれたら嬉しいです。まちのことを考えることが楽しくできれば、自分たちの住むまちのことをもっと好きになってくれるのではないでしょうか。未来のたまプラーザがどんな風になっているのか、楽しみです！（椿崎）







●インターンレポーター：青山学院大学 社会情報学部 社会情報学科 ３年　椿崎 真菜
●開催日時：2018 年 2 月 25 日　●実施場所：PEOPLEWISE CAFE　●参加者：たまプラーザに住む子どもたちと保護者の方

手づくりの楽しさは人を繋ぐ

たまプラーザ桜まつり　缶バッジづくりコーナー

快晴の空と満開の桜、たまプラーザの桜まつり

お天気に恵まれ、今年で第９回目を迎えた「たまプラーザ桜まつり」。開催場所は横浜市青葉区の美しが丘公園で、私が予想していた以上に大規模なお祭りでした。広々とした公園内では様々なブースがあり、ステージ上では地域の方々のパフォーマンスが行われ、公園の周囲にも小さなフリーマーケットのブースがずらりと並んでいて、とても賑やかな雰囲気でした。この日は、「次世代郊外まちづくり」という、大都市郊外部におけるまちの課題に対して、新しい試みを実験的に行い、次世代につなぐまちづくりをしているプロジェクトの PR 活動として、缶バッジづくりのお手伝いをさせていただきました。

大盛況 !! 手づくりの楽しさは世代を超える

缶バッジづくりは多くの方に参加していただけました。当日一緒にバイトしていた子に話を聞くと、

「昔、家で缶バッジづくりできるおもちゃがあって、その時は、付属の台紙でつくったり、広告紙にあった写真を切ってつくったりして、結構楽しかった思い出だよ。」

と缶バッジづくりが流行っていた時期もあったそうです。今、子どもたちの生活環境は、電子機器に囲まれた、デジタル社会が一般的で、自分の手でつくる、アナログ的なものには関心がないかなと思いましたが、缶バッジづくりがはじまると、イベントの最後まで、列がほぼ一度も途切れませんでした。また、子どもはもちろん、大人の方も目をきらきらと輝かせて、興味津々に見てくれました。

缶バッジづくりでは、子どもや高齢者、車やバスのイラストなど、様々な絵柄が描かれ、どれもかわいくて色鮮やかでした。後で話を聞くと、実は、たまプラーザで行われた地域のイベントや取り組みに関する内容で、缶バッジを切り口にして、参加者が日常的に身につけることにより、まちづくりに日頃から関心をもってもらうきっかけづくりだったことが分かりました。

小さなきっかけから、人々と共に歩むまちへ

缶バッジづくりに来てくれたのは主に子連れの家族で、様々な家族のあり方を発見しました。そばに立ち、子どもがつくるのを静かに見守る親や、絵柄選びから、子どもと一緒に作業をする親もいました。弟や妹を優しくフォローし、仲良く作業していた兄弟たちもいて、缶バッジづくりを通して、家族が協力し合い、完成品を持って和気藹々と帰っていくのを見ると、まちづくりの PR 活動として行われた缶バッジづくりという小さな活動が、まち全体がこれからよりよくなっていくきっかけになるだけでなく、そのまちに住んでいる一つ一つの家族の関係性を築いていく効果もあるのではないかと思いました。（卓）







●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科 修士２年　卓 映萱
●開催日時：2018 年 3 月 31 日　●実施場所：美しが丘公園　●参加者：地域住民、地域団体の方々

みんなの想い込めて　目指せ！新たなシンボル

第４回｜西武新宿駅前通り沿道まちづくり検討会

それぞれが想い描くまち、どう変わるか

今回、私は西武新宿駅前通り第４回検討会、中間まとめの回に参加しました。これまで話し合ってきた街路樹・街路灯・横断防止柵の配置を決めるのが目的です。ただ、ここには沿道の地権者、企業、地域組織の方々、様々な背景を持つ方々がいます。それぞれ、まちへの想いがあり、各立場での意見が存在しています。例えば、対象となる駅前通りは日本一の歓楽街、「歌舞伎町」に位置し、海外からも大勢の観光客が訪れる場所です。このような商業エリアがより繁盛するよう、今より清潔で煌びやかで賑やかな街並みにしていく意見があります。一方で、過去の面影を残したい想いで、レンガと緑あふれる街並みにする意見もあります。このように、様々な考えがあったとしても、両者ともまちへの愛着からなので、簡単に切り捨てるわけにはいきません。そこで、各チームのファシリテーターが、個々の想いを掘り下げ、全体的な利益からも分析し、みんなが納得するような結論を参加者と一緒に考えます。

まちのために木を切る !?

対象の敷地周辺には歌舞伎町一番街や TOHO シネマズ、多くの飲食店等があり、いつも若者や観光客で賑わっています。しかし、さらに駅前通りを北へ進むと、徐々に人影が少なくなります。人の流れが少ないうえ、レンガ造りの街並みが少し暗く、街路灯も街路樹により遮断され、昼間ですが薄暗いイメージを抱くかもしれません。この沿道まちづくりをきっかけに、参加者の皆さんは意外な決断をされました。それは、街路樹が茂みを持つことで逆に暗くなってしまったため、適度な本数に減らすことにしたのです。また、より明るいイメージをつくるため、道路の舗装を白など明るい色にする意見がでました。それに対し、将来の維持を考え、明るい色は汚れが目立ちやすく、キレイなまちの維持にコストが高くなる声もありました。全体のイメージづくりは壁や床のタイル一つでも、全く違う雰囲気になります。現実的な部分も真剣に見直さないと問題が生じ、環境が維持できなくなり、寂しいまちになってしまうかもしれません。理想と現実の溝を埋めることは大事ですね。

積み重ねた議論で築いたステキな暮らし

当日、会場では検討している沿道の模型が展示され、その模型を見ながら考える方もいれば、模型を使って自分の想いを語る方もいました。そんな参加者の皆さんを側から見て、もしかしたら、今まで私が通ってきた道にあるものは、当たり前にあるように見えるが、実は、多くの人が議論を重ねて、決めてきたのかもと思い、感心しました。まちづくりは一時的なものではないため、じっくり考え、しっかり議論して、地域に関わる人々の努力でやがてできあがったまちは、一生の宝物です。（卓）







●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科 修士２年　卓 映萱
●開催日時：2018 年 3 月 27 日　●実施場所：AP 西新宿ルーム A　●参加者：西武新宿駅前通り沿道の地権者・企業・地域組織の方々

「つくって終わり」にしない！まちの使い方まで考える

第６回｜西武新宿駅前通り沿道まちづくり検討会

地域の人の想いを受け止めた道のデザイン

西武新宿駅周辺の再開発に合わせて、沿道を歌舞伎町の玄関口としてより魅力的に整備するための検討会。全８回のうち第6回目となる今回は、これまでのワークショップでの協議内容を踏まえたデザインチームからの提案と、それに対する対話が主な目的でした。これまで、まちの皆さんと議論を重ね、想いを積み上げてきた成果がどのようなカタチになっているのか、会の開始を待つまちの皆さんの表情は、期待しつつも、一方で少し不安な気持ちもあるように見えました。ところが、会のはじめに行われたデザインチームの提案は、まちへの想いをしっかりと受け止めた素晴らしいものでした。まちの未来が描かれたパースからは、受け継いできた伝統を守りつつ、時代の変化に対応する、新しい西武新宿駅前通りのイメージが湧きました。また、まちを象徴するような商店街灯やモニュメントに加え、街路樹や横断防止柵など細かな点についての具体的な提案も印象的でした。

みんなで考えるまちの使い方

会の後半は、各グループに別れてどんな印象を受けたか話し合いました。６回目ということもあって、権利関係や許認可の面から見て実現できる可能性はあるのか、もしダメだったときの代替案はどうするべきか、より具体的な意見もあがりました。中でも印象に残ったのは、実施後のまちの使い方です。舗装を明るくした分汚れが目立ってしまうのではないか、荷捌きのルールを決めないと渋滞につながってしまうのではないか、など実際の使われ方を想像した上での課題が多く出ました。このような意見が出るのは、普段からまちを見ているからこそだと思います。

将来のまちのために

３グループの成果を発表して意見を共有した後、まとめを行いました。まちの課題の解決策を考える中で、どのようにまちを使うべきか、維持管理の仕方についても議論が進みました。沿道整備が終わった後も、訪れる人やお店を営む人にとっても心地よいまちの環境を維持していくには、まち全体でのルールづくりが重要だと思います。あと２回で、ワークショップは一区切りですが、沿道整備が終わるのはしばらく後です。このような場を設けることで、今から将来のまちのことを考え、まちの皆さんが主体的にまちづくりに関わっていく体制をつくっていく必要があることを改めて実感できたワークショップでした。ワークショップ終了後は、会場から西武新宿駅方面が良く見えたため、全員で窓を眺めながら、まちの未来について想いを語りあいました。このような小さな体験がまちへ関わるキッカケになることを祈っています。（甲田）







●インターンレポーター：首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域 修士１年　甲田 亮輔
●開催日時：2018 年 5 月 21 日　●実施場所：AP 西新宿ルーム C　●参加者：西武新宿駅前通り沿道の地権者・企業・地域組織の方々

ものづくり体験は夏まつりの忘れられない思い出と共に

さんかく BASE 夏まつり　缶バッジ・とうろうづくりコーナー

夏祭りでものづくり体験のお手伝い

約 8 万人もの老若男女が夏の憩いを求めて訪れ、浴衣姿の来場者も目立った「第 35 回たまプラーザ夏まつり」。同日に、次世代郊外まちづくり活動の拠点である「WISE Living Lab さんかく BASE」では、「さんかく BASE 夏まつり」を開催。ゆかたの着付け･撮影イベントや打ち水などを実施し、私は、「缶バッジ･とうろうづくりコーナー」にスタッフとして参加し、子どもたちを中心に、参加者にものづくりを体験してもらいました。

それぞれの愛着が見える個性豊かな作品たち

担当したコーナーでは、こだわりや好みに合わせて、絵柄入り・塗り絵型・オリジナルの 3 種類の台紙から自由に選ぶことができます。特に、低学年くらいまでの子には塗り絵型の台紙が人気でした。イラストのモチーフは、たまプラーザのまちなかにある建物や公園、乗り物など。中でもロケット型の遊具がある公園のイラストや、かわいい動物入りのイラストが人気を集めていました。また、中学生以上はオリジナルをつくる台紙を選ぶことが多く、受験に向けて家族で合格祈願のキーホルダーをつくる姿もありました。参加者の方たちが綺麗にできあがった完成品を見て、歓声を上げて嬉しそうにする様子に、私も暑さを忘れて一緒に楽しみました。

子どもたちの目線で、夏の思い出を追体験

「とうろうづくり体験」では、子どもたちがイラストを描き、つなぎ合わせた和紙を、竹串や輪ゴムなどを使い、三角形のタワー状に組み立てました。花火大会や海水浴など夏休みの体験を絵にする子が多く、子どもの目線から見た瑞々しい夏の思い出を、私も追体験しているかのようでした。また、完成品と一緒に記念撮影をしたり、描いた絵を見ながら会話を弾ませる親子の姿に、活発なコミュニケーションが生まれていると感じました。街路に灯ったとうろうの姿が、地域の人たちが行き交う街路を明るく、安全にという願いがこめられているようにも見え、このまちの明るい未来も照らし出しているかのようでした。

子どもたちの「顔」が見えるものづくり体験

最盛期はスペースからあふれるほど賑わった「缶バッジ･キーホルダーづくり体験」では、用意された道具を譲り合いながら、オリジナルグッズをつくろうと参加者が目を輝かせて取り組んでいる姿が印象的でした。また、「とうろうづくりコーナー」では、終始和気あいあいとしながらも、一人ひとりがゆったりとした時間を過ごしているようでした。自分がつくったものを通じて、経験したことや、住んでいるまちについて知る可能性を秘めているものづくり体験。イベントを通し、このまちに住む人たちの「顔」が見えたような気がします。（堀越）







●インターンレポーター：早稲田大学 人間科学部 人間環境科学科 4 年　堀越 まい
●開催日時：2018 年 7 月 29 日　●実施場所：WISE Living Lab　●参加者：たまプラーザ駅周辺地域の子どもから大人まで

アバターづくりでまちづくり!?　みんなで描く未来の渋谷

渋谷の未来を描くワークショップ｜代官山・恵比寿・広尾周辺エリア

ちがいをちからに変える街、渋谷

都市計画と区独自のまちづくりを組み合わせた「渋谷区まちづくりマスタープラン」。渋谷区に関わる人々の想いを集め、マスタープランに反映させるためのワークショップに参加しました。渋谷区内5つのエリアで行われ、今回は代官山・恵比寿・広尾周辺エリア。参加者のメインは30～40代。60歳以下の幅広い世代が集まりました。オープニングトークでは、「未来志向」「自分ごと」「ちがいをちからに」の3つのキーワードが強調されました。また、渋谷区からは『あなたの知識も、経験も。あなたと誰かの「ちがい」はすべて、この街のちからになっていきます。YOU MAKE SHIBUYA。』という力強いメッセージが送られました。

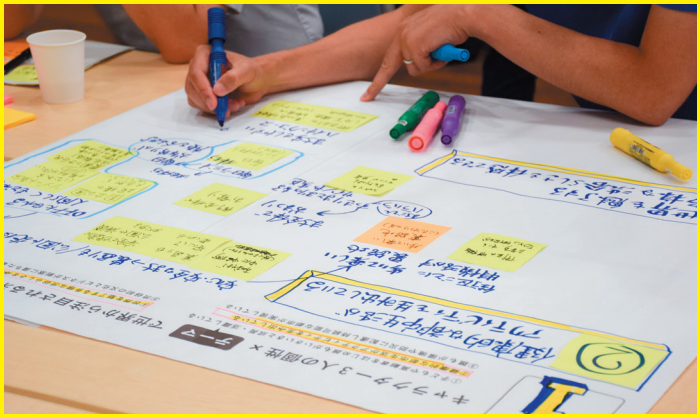
未来の渋谷に住むアバターづくり

今回のワークショップでは、未来の渋谷に住むアバターを通してまちづくりを考えました。はじめはアバターづくりに戸惑い、あまり手の動いていなかった参加者も、ペアで議論を重ねるうちに渋谷への想いに話が盛り上がり、アバターを発表する頃には、目をきらきらさせながら話していました。例えば、30代の女性と50代の男性の新しい物好き2人が発表したアバターは、セグウェイに乗りゴーグルを着けたカラフルな猫「ジェイニー」。猫の目で表通りだけではない街の魅力を発見したい、セグウェイに乗り、好きな服を着て自分の個性に正直でありたい、そんな想いが込められているそうです。普段の職業・年齢・性別など自分の属性をアバターに置き換えることで、広い視野からまちを見て、より身近に未来のまちを考えられるようです。

渋谷の未来を描く

ワークショップの後半では、個性豊かなアバターが楽しく共創できる未来の渋谷を描いていきました。グループごとに討論が行われ、テーマは、都市生活、防災、文化からビジネスまで多岐にわたります。例えば、通信技術の発達で「すべての問題を1分以内に解決できる街」、渋谷らしさを活かした「アート、音楽、ファッション『特区』で発表・表現できる街」などの案が生まれました。どの意見もクリエイティブで、個々人の知識やバックグラウンドが生かされ、まさに「ちがいをちからに」新しい渋谷の未来像が多様に描かれているようでした。今回のワークショップのように、身の回りにある課題・不満ではなく、起こりうる社会変化や技術革新を柔軟に想定することで、より自由な未来志向の都市像を発想することができるのではないでしょうか。今回の成果は一旦取りまとめられ、渋谷区民に共有されるそうです。今回のワークショップが、渋谷の未来像の実現に向けた大きな一歩になることを、私自身も祈っています。（久保）







●インターンレポーター：東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻 修士1年　久保 夏樹
●開催日時：2018年8月5日　●実施場所：地域交流センター新橋　●参加者：代官山・恵比寿・広尾周辺で暮らす人、働く人、関係している人

どうなる？ミライのカワサキ公共施設「中原太朗さん（仮）」の 30 年後とは？

カワサキ公共施設のミライを考えるアイデアワークショップ

未来を担う世代が参加

市民が利用しやすい未来の公共施設について考える「カワサキ公共施設のミライを考えるアイデアワークショップ」。参加者は、20 ～ 40 代を中心とした、まさにこれからの川崎を担う世代。中には、川崎にキャンパスがあるという学生さんの姿もあり、活気にあふれた時間となりました。これからの社会状況をもとに公共施設の現状と市民のニーズを学び、「カワサキ公共施設ミライ研究所」の一員となったつもりで、ともに 30 年後の公共施設の活用方法を考えました。

ペルソナから導くカワサキのミライ

まず、どんな人に公共施設を使ってほしいのかを考えるために、ペルソナを設定。あるチームに参加していた 5 歳のお子さんの 30 年後を考えようということになりました。ペルソナの名は、中原太朗さん（35 歳）。中原区に住むサラリーマンで、夫婦共働き、子どもが 2 人。会社や自宅、コワーキングスペースで仕事をしています。趣味は e スポーツとフットサル。2018 年の“今”らしい設定ですね。このように、できるだけ具体的な設定をして、「この人なら公共施設にこんなニーズがありそうだね」、「こんな施設があったらいいよね」と、ソフト面からハード面に落としこんでいけるよう、意見を出し合いました。

未来志向型ワークショップ

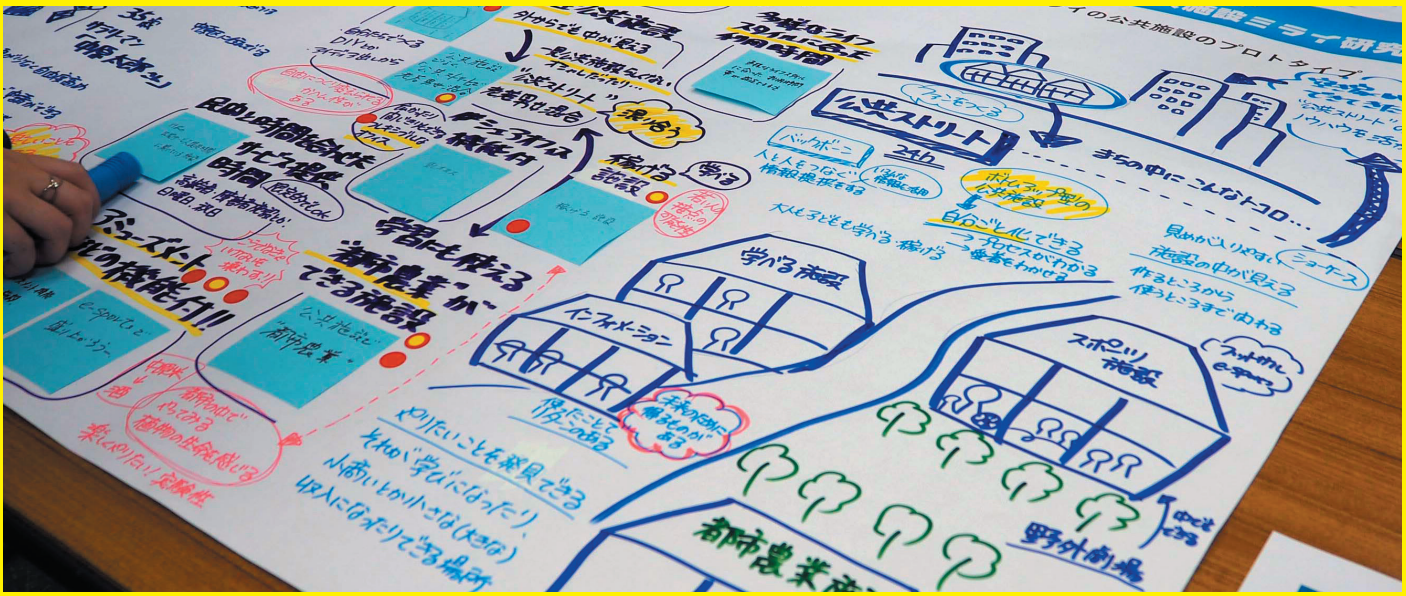
今回は、「こんなものが合ったら良いよね」と、アイデアベースで具体化していく未来志向型のワークショップ。30 年後には、IT や AI の発展により、医療や介護、買い物など時間軸からモノの流通まで日常生活がガラッと変わっていたり、いろいろなものをシェアする時代になっているかもしれません。そういった新しいものと、既存の川崎の自然や町工場の技術、民間企業等の資源を有効活用しながら、カワサキのミライを想像していきました。

30 年後の主人公になったような気持ちで

最初にペルソナを設定したことで、参加者の皆さんはその主人公になり切ったような気持ちで「自分ごと」として捉え、川崎について思いを巡らせているようでした。未来を考えることで自然と発言が前向きになっているせいか、笑いが起きたり、自発的な発言があったり、盛り上がっているようでした。学生さんならではの興味深い意見もたくさんあったので、このワークショップを機に、若い世代を巻き込んで一緒に盛り上げていけたら良いなあと思いました。今回出し合ったアイデアは、現実的に需要があるといえる形になっていると思うので、これから川崎でどのアイデアが実現していくのかとても楽しみです。（中村）







●インターンレポーター：産業能率大学 経営学部 現代ビジネス学科 4 年　中村 実穂
●開催日時：2018 年 11 月 3 日　●実施場所：中原区役所　●参加者：川崎で暮らす人、働く人、関係している人

このまちで働く自分を想像してみる１日

採用予定者向けフォロー研修

いつもと一味違うワークショップ

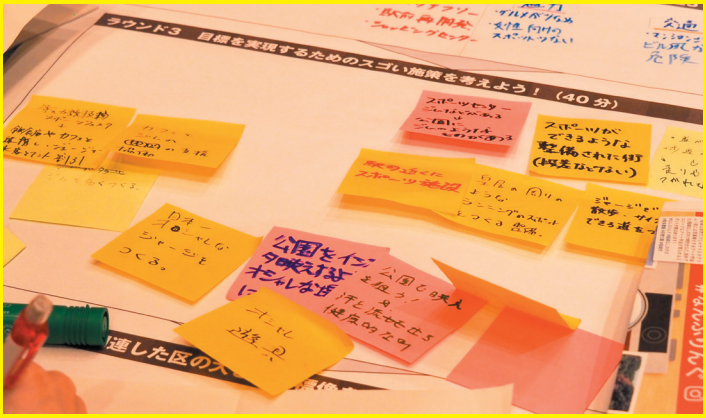
今回私がお手伝いしたのは、内定者研修。市では、本採用前に内定者へ向けた事前研修を行っています。研修といっても、座って話を聞くのではなく、割り振られた班ごとでワークに取り組むことが中心です。主役は内定者の皆さん。積極的な議論が求められます。ワークでは、割り振られた区ごとに、区が抱える課題の解決方法に挑みます。ポイントは、行政職や専門職等の垣根を超え、通常業務の範囲では難しい課題に、大胆な解決方法を提案すること。課題は、「禅寺丸柿を世界的な果物にするには？」など、どれも各々の得意分野や川崎市に関する知識を最大限に活用して考えなければならないものばかりです。

川崎市について本気で考える！

まずは、割り振られたテーブルに着席して顔合わせ。この研修で初めて顔を合わせる人も多く、かなり緊張している様子でした。席についてからも、会話はほとんどなく、静かなスタート。研修の趣旨や進め方の説明が終わって、いよいよワークショップが始まっても、遠慮がちに意見を出し合っている様子でした。しかし、私たちや、先輩職員の方々が、サポートしていくうちに、次第に議論も活発になっていきました。全３ラウンドの構成で、まず、区の良い点や課題点を出し合います。席を移動してから、整理した現状をもとに、大きな目標像を描きました。その後さらにメンバーを入れ替え、目標を実現するための具体的な施策を考えました。「川崎市をつなぐ新たな鉄道路線網をつくる」など、大胆な提案が多かったです。最後は、各班の成果を発表後、良かった班にシールで投票。最もシールを獲得した班には、市から記念品が贈呈されました。どの班も、初対面の人も多いなかでつくった提案とは思えないほどクオリティの高いものになっていて、内定者の皆さんの川崎市への理解が深まったように感じられました。

少しだけ先の自分の未来を考える

緊張しきっていた内定者の皆さんも、徐々に打ち解け、発表では、時折会場全体に笑いが生まれていました。休憩中も積極的にコミュニケーションをとったり、連絡先を交換したりする場面が多く見られたのが印象的で、わずか１日の間に内定者同士の仲がグッと縮まったようでした。将来の同僚達と一緒に、区の抱える課題について活発に議論を交わしたことで、自分が市で働く実感も湧いたことでしょう。参加者の多くが、今はまだ学生。同じ学生である私もそうであるように、少し先の未来で自分がどのように働いているのか、なかなかイメージできない人が多いと思います。今回の事前研修が、内定者の皆さんご自身が働く姿をイメージし、より川崎市へ愛着を持っていただくきっかけになりそうだと感じました。（甲田）







●インターンレポーター：首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域 修士１年　甲田 亮輔
●開催日時：2018 年 11 月 9 日　●実施場所：川崎市役所第４庁舎大ホール　●参加者：川崎市の本採用前の試験合格者

つながることで壁を越える

地域・社会貢献フォーラム 2018 カワサキコネクト

5 つの視点から活動を考える

川崎市を中心に、もっと活動の幅を広げたい、何か新たな取り組みを始めたいと思っている人や団体が、出会い、知り、つながる場となるフォーラム「カワサキコネクト」のお手伝いをしました。まず、市内の様々なジャンル、地域で活動している 5 名のスピーカーから、自身の活動概要や経験、これから自分たちのまちをどうしていきたいかなどの事例紹介がありました。「コミュニティカフェ」「起業・中間支援」「不動産活用・地域ブランディング」「子育て世代の活動」「新しい地域組織」といった各視点から地域課題解決の鍵となるお話で、広い視野から、活動継続や課題解決の可能性を考えました。次に、スピーカーによるトークセッションが行われました。それぞれの活動の重なる部分や、違うからこそ気になることを話す中で、「住民 / 市民の主体性をいかに育てるか」「つながるコツ」など、経験やアイデアから共通課題や新たなひらめきも生まれているようでした。

それぞれの経験を共有する

その後、活動区域やジャンルを超えたつながりや連携のきっかけをつくるため、スピーカーとその活動に興味を持った参加者を加えて、5 つのテーブルに分かれてディスカッションを行いました。語り尽くせなかったスピーカーの経験談を聞いたり、参加者それぞれの活動の悩みに対して、スピーカーがアドバイスをしていました。また、全体を通して、スピーカーへの “ お悩み相談 ” に陥らず、参加者同士で悩みに共感したり、アドバイスしたりするなど、ひとりひとりがその場の話題を “ 自分事 ” として捉えながら話合うことで、とても創発的な場になっているようでした。加えて、互いにスキルを持った知り合いを紹介することで解決している場面もあり、このフォーラムらしい “ つながる ” 様子がとても印象的でした。

わくわくするつながりを得る

事例紹介や交流プログラムの他にも、活動紹介のブースが常設され、防災などにも役立つ炊き出し料理のレシピブックや団体の事務作業を代行するサービスの紹介など、川崎の様々な活動を知る機会にもなっていました。休憩時間や終了後には、各ブースで互いの活動に興味を持って話をしていたり、「コラボすることでよりよくできるのではないか」といった話もされていました。また、「川崎市市民文化局」のブースでは、未来の川崎のまち並みをイメージしたポスターに、「縁側カフェがあること」や「子どもが安心して外で遊べる」といった参加者からのメッセージが貼られていました。このフォーラムを通し、参加者の皆さんにとって、「将来、こんな川崎にしたい！」というモチベーションも高まる場になったのではないかと思います。（小田）







●インターンレポーター：東京都市大学 都市生活学部 都市生活学科 4 年　小田 史郎　●開催日時：2018 年 11 月 15 日
●実施場所：川崎商工会議所 KCCI ホール　●参加者：地域・社会貢献活動や団体間連携に関心のある NPO、企業、ソーシャルビジネス事業者など

素敵な川崎を“みんな”でつくりあげよう！

全市シンポジウム「希望のシナリオ」～これからの地域づくりを考える～

100名以上が集まり、本気で話し合う！

川崎市の「これからのコミュニティ施策の基本的考え方（素案）」を知り、これからのコミュニティのあり方について考えるシンポジウム「希望のシナリオ」に参加しました。会場には、川崎市内に在住、在学、在勤、または市内で地域活動をしている高校生以上で、コミュニティに興味がある参加者が90名以上、行政の方を含め、150名以上の方が会場に集結しました。プログラムは、市長のスピーチや施策についての説明を聞いた後に、地区ごとのテーブルで意見を交換し、その後、全体で意見交換をする流れ。私が参加した高津地区のテーブルでは、「本気で川崎市を良くしていきたい」と動きはじめる市民の数を増やすために、どうやって熱意を伝染させていくか、行政の取り組みをどのように市民の活動に役立てていくかなど、施策だけでなく参加者自身の活動と絡めながら、現実的で熱意の感じられる意見交換が行われました。

行政と市民でつくるコミュニティ施策

全体での意見交換では、「今後どうなっていくのか不安」「今までの仕組みはなくなってしまうのか」といった、変化に対する不安の声もありましたが、「理念にはとても共感できる。これからが楽しみ」といった、これからの活動に期待する意見も多く見られました。また、「理念には共感できるが、どう実現していくのか」という具体性についての疑問も投げかけられました。また、「これから先のワークショップで市民の方々と話し合いながら、実現の方向性を決めていきたい」という回答に対し、「丸投げにならないか心配」という声があがる一方で、「これからのワークショップに備え、しっかりと考えて参加するようにしたい」といった前向きな意見もあがりました。

双方のあり方を受け入れながらの変化を

今回のシンポジウムでは、これからの市民と行政のあり方を考える場が多く持たれたように思います。福田市長のスピーチでは、「行政も変わっていくので、市民の方々もそれを理解してほしい」という内容がありました。たしかに、どちらかが変わるだけでは、もう片方がその変化を阻害してしまいます。双方のあり方を受け入れることができるように変化していくことこそが、これから求められている姿勢ではないかと感じました。そういった視点で見ると、今回のシンポジウムでは、忌憚なく意見を交換したことで、行政と参加者の距離が縮まったように感じられました。第2部として行われた交流会では、運営側である職員も、行政という属性を持った一人の市民として、参加者と会話を楽しんでいるようでした。そんな光景からも、今後こういったシンポジウムを重ねたら、川崎のミライが素敵に変わっていくのではないかと、私も楽しみになりました。（小田）







●インターンレポーター：東京都市大学 都市生活学部 都市生活学科 4年　小田 史郎
●開催日時：2018年12月9日　●実施場所：エポックなかはら大会議室（7階）　●参加者：市内在住、在学、在勤、市内で地域活動をしている高校生以上

インターン・ワークショップ・レポート *2022_2018*
Student Intern Workshop Report

2023 年 3 月 31 日 発行

株式会社　石塚計画デザイン事務所
https://ishi-community-design.jp/

Intern Reporter 2022
小笠原 瞳子・勝間 晴規・中嶋 美月・溝口 開人・森本あんな

Intern Reporter 2021
葛西 芳枝・中島 純・三國 陸真・溝口 開人

Intern Reporter 2020
浅野秀矢・小澤萌子・溝口開人

Intern Reporter 2019
秋元友里・大橋朋実・小田史郎・西川理奈・増田里奈

Intern Reporter 2018
小田史郎・久保夏樹・甲田亮輔・卓映萱・椿崎真菜・中村実穂・堀越まい

Special Thanks
鈴木徳子（Writer ／ Editor）

Sapporo Office
〒 060-0002
札幌市中央区北 2 条西 2 丁目 26 番地 道特会館 4F
Tel:011-251-7573　Fax:011-251-7574

Tokyo Office
〒 150-0045
東京都渋谷区神泉町 20-24 BRICKS 7F
TEL:03-3461-5120　FAX:03-3461-5144